

竹野姫様、宜しく御願ひ致します」

竹野

「何と凛々しい清照姫様の御姿、さうぞ男の難に會はないやうに氣をつけて下さいませ。貴女も一度御経験が御有りなさるのですからなア」

清照姫は少しく頬を赤らめて差俯むくしほらしさ。北光彦は母子の首途を祝すべく

音吐朗々として宣傳歌を歌ひ始めた。

北光 「神の御稜威も高照の

狼さんの岩窟戸に

北光彦や竹野姫

姫命の首途を

謹み敬ひ宣べ立つる

山奥深く築かれし

教を開く宣傳使

黄金姫や清照の

祝して清き宣傳歌

あ、惟神々々

御靈幸はひましくて

秋の草野の色深き

姫命の御使に

大御力を授けつゝ

セーラン王の館へ

皇大神の御言もて

竹野の姫と諸共に

イルナの都の曲神を

神に代りて宣べ傳ふ

月は盈つ共虧くる共

イルナの都に立向ふ

黄金姫や清照の

仁慈無限の大神の

眷族共に守らせて

遣はし奉る勇ましき

天の目一個神司

汝が命に打向ひ

言向和す出陣を

朝日は照る共曇る共

假令大地は沈む共

魔神はいかに荒ぶ共

皇大神の守ります

三五教の神司

恐る、ここは更になし

惡逆無道の神司

右守神のカルチン

それに従ふ曲神は

いかに澤山あるにても

生言靈の神力に

言向和し三五の

教にまつろへ和す事

火を睹るよりも明けし

さはさり乍らバラモンの

大黒主は名にし負ふ

八岐大蛇の生宮に

下り果てたる靈なれば

いかに尊き神力も

容易に亡ほす術もなし

心ひそめて時を待ち

彼等が自ら弱りはて

悔悟の念の起るまで

ひそかに事を計るべし

先づ第一にセーランの

王をば救ひ一族を

助けてこれの岩窟に

深くかくした其上で

大黒主の軍勢を

生言靈に悉く

言向和し、さもなくば

海の彼方に追ひちらし

三五教の神力を

時節をまつて照らすべし

時の力は天地を

造り玉ひし大神も

左右し玉ふ事ならず

こゝの道理を聞き分けて

慌す騒がず悠々

時節を待つて曲神を

言向け玉へ惟神

神に代りて北光の

神の司が宣へ傳ふ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましましてよ

竹野姫は又黄金姫母子の首途を祝し、宣傳歌を歌ふ。

竹野「鬼熊別が妻神と

現はれ玉ひし蜈蚣姫

心の暗の戸押し開き

眞如の月の御光に

照らされ玉ひ三五の

神の司と進みまし

名さへ目出たき黄金の

姫の命と言あけし

黄龍姫と現はれて

龍宮島に時めきし

小糸の姫も今は早

三五教の神司

清照姫となり玉ふ

神の恵の幸ひて

曲は忽ち善となり

曇は晴れて大空の

青きが如くすく〜と

心勇ませ玉ひつゝ

神素盞鳴大神の

御言畏み秋の空

草鞋脚絆に身をかため

心も軽き蓑笠の

其いでたちの勇ましき

思へば〜三五の

尊き神の御教は

魔神は忽ち善となり

鬼は佛となり變り

狼さへも斯の如

いと従順になりおへぬ

黄金姫よ清照の

姫命よ汝は今

イルナの都に到りなば

我情我慢の雲を去り

仁慈無限の大神の

清き心に神ならひ
 無抵抗主義を發揮して
 善に導き救ひませ
 意念はいかに強く共
 慈悲の心に及ぶまじ
 及ほし救ふ神心
 あ、惟神々々
 汝が命の出陣に
 あ、惟神々々
 國津神たち八百萬

あく迄争ひ競ふなく
 四方にさやれる山神を
 何程智識はささく共
 禽獸虫魚を助くるは
 慈悲博愛を禽獸に
 必ず忘れ玉ふまじ
 神に祈りて竹野姫
 際して忠告仕る
 守らせ玉へ天津神
 母子二人の成功を

指折り數へ待ち暮らす
 心に深く刻みつゝ
 成功祈り奉る』

竹野の姫の志
 よく出でませよ神司

と歌ひ了り、神殿の神酒を下け來りて、母子に戴かせ、門出を送るのであつた。

黄金姫は簡單に三十一文字を以て答禮に代へた。

黄金「北光の神の命や竹野姫

其宣言を固く守らむ。

世を救ふ心の丈の清ければ

世に恐るべき曲はあるらめ。

いざさらば之より進み入那國

セーラン王を守り助けん」

清照「二柱神の御言を畏みて

母子は心勇みてぞ行く。

狼の御伴の神に守られて

入那の國に進む嬉しさ。

北光の神の命よいざさらば

待たせ玉へよ歸り来る日を。

竹野姫神の命に物申す

汝が背の君をよく守りませ」

竹野姫は之に答へて、

竹野「大神の御稜威も空に高照の

イルナに進む人ぞ尊き。

北光の神の司は生神よ

今日は岩窟に明日は入那に」

黄金「いと清き神の司の御教に

われは進みて都へ上る。」

いざさらば二柱ごもまめやかに

神の大道に仕へ玉はれ」

かく歌ひ別れを告げて、再び身づくろひをなし、黄金姫、清照姫は狼に送られ、急阪を勇み進んで下り、山口に出で、再び元來し道に引返し、照山峠を越えて入那の

都に進むことゝなつた。

(大正一一、一二、一三、舊九、二三、松村真澄録)

瑞 月

足乳根の老います母を偲びつゝ

出で行く吾は涙溢るゝ

教へ子の驚き如何に深からむと

思ふに付けて涙の雨降る

第一章 麓の邂逅 (一一五)

龍雲

「高照山の岩窟に

思はぬ人に巡り會ひ

秋野を飾る黄金の

心も清照姫命

細き谷間を辿りつゝ

神の御歌を歌ひつゝ

峠をさして来て見れば

男女三人の人の影

狼きもに誘はれ

思はぬ使命を受け乍ら

姫の命の宣傳使

母娘は勇み雀躍し

秋風すさぶ大野原

勇み進んで照山の

道の傍の岩の上に

何かヒソ／＼囁きつ

麓の邂逅

母娘の姿を打まもり

驚異の眼を光らせつ

黄金姫に打向ひ

もしく旅のお方様

何れへおいで成されます

私はイルナの都まで

歸り行く身の三人連れ

何卒お伴を願ひます

つらく眺め参らせば

貴女は尊き宣傳使

三五教の人ならん

私も同じ三五の

道を奉ずる神の御子

心汚き龍雲の

おちぶれ果てた此姿

直日に見直し聞直し

お伴に仕へさせ給へ

あ、惟神々々

神の救ひに預かりて

清き神代も北光の

目一箇神に助けられ

七千餘國の月の國

經巡り終へし修驗者

決して怪しき者ならず

お伴に仕へさせ給へ

これにまします姫神は

イルナの都に隠れなき

左守の神の姉の御子

ヤスダラ姫の神司

一人の男はテルマンの

姫の國より従ひて

此處まで送り來りたる

忠誠無比の僕ぞや

あ、惟神々々

神の恵みの幸はひて

イルナの都に起りゐる

騒ぎを清く打ち鎮め

セイラン王の身の上を

救ひまつらんと思へども

神力足らぬ龍雲や

ヤスタラ姫が如何にして

此大任を果し得ん

三五教の宣傳使

我等が微衷を憐れみて

救はせ給へ 惟神

神の御前に真心を

捧けて祈り奉る

龍雲は歌を以て黄金姫一行に掛合つて見た。黄金姫は直に歌を以てこれに答へた。

黄金「天と地とを造らし、

國治立の大神や

豊國姫の守ります

三五教の神司

妾は黄金姫命

一人の女は我娘

清照姫の宣傳使

高照山の岩窟に

狼等に伴はれ

登りて見ればこは如何に

三五教の神柱

北光神を始めとし

竹野の姫は悠然と

數多の狼使ひつゝ

岩窟の主人となりすまし

禽獸虫魚に至るまで

尊き神の御恵みの

露を施し給ひつゝ

鎮まりります尊さよ

北光彦の御言葉に

汝黄金姫命

必ず途中に龍雲が

ヤスタラ姫を伴ひて

イルナの都に進み入る

そのの途中に會ふならん

汝は我の言の葉を

ヤスタラ姫の一行に

完全に細さに物語り

高照山の岩窟に

直様進み來るべく

諭せと厳しく宣へ給ふ

汝は正しく龍雲か

ヤスタラ姫の神司

テツキリそれと覺わたり

さあ今よりは道を變へ

狼群がる高照の

深山をさして進むべし

我等母娘は逸早く

照山峠を乗り越えて

入那の都へ進み入り

セイラン王の一族を

救ひ助けて高照の

狼岩窟に導きつ

御身を厚く守りなん

あゝ惟神 々々

神の御言を蒙りし

黄金姫の言の葉を

夢々疑ふこと勿れ

人は正しき神の御子

水晶魂を與へられ

神の柱と敬はれ

尊き道の宣傳使

神のまに／＼任けられし

清き魂を持ち乍ら

嘘偽りを言ふべきや

早く座を起ち進みませ

北光神の御言もて

汝等三人に打向ひ

委曲に勧め奉る

あゝ惟神 々々

御靈幸はひましますよ

と歌ひ終ればヤスタラ姫はこれに答へて歌ふ。

ヤスタラ 「あゝ有難し／＼

聲名高き三五の

教を傳ふる宣傳使

黄金姫にましますか

若き女の神司

音に名高き清照の

姫の命にゐませしか
 誠に御無禮仕り
 只今貴女のお言葉に
 イルナの都へ行かずして
 深山の奥の岩窟へ
 北光神の御言もて
 いつの世にかは忘れまじ
 我は卑しき神の御子
 救はせ給へ惟神
 姫の司の御前に
 存せぬ事とは云ひ乍ら
 謝罪の辭もありませぬ
 妾一行三人は
 一時も早く高照の
 進み行けよと宣り給ふ
 宣らせ給へる御親切
 不運の重なるヤスダラの
 大慈大悲の御心に
 黄金姫や清照の
 真心こめて願ぎ奉る

あ、惟神 々々

御靈幸はひましませよ」

と歌つて感謝の意を表した。清照姫は聲も涼しく歌ひ初めた。

清照「御空に月は清照の

きらめく星の数の如

却河の眞砂の数多き

青人草の艱みをば

救ひ助けて天國の

御園に導く宣傳使

三五教の大神の

御言畏み遙々こ

月の國をば横断し

ハルナの都に立向ふ

尊き使命を身に帯びし

母娘二人の神司

イルナの都の刹帝利

セーラン王の危難をば

救はんものと北光の

神の御言を畏みて

イソく進む道すがら
 此場で巡り會ふたるも
 一時も早く我母の
 山に進ませ玉へかし
 王の命を守りつゝ
 無事を祝することあらん
 躊躇ひ給ふ其中に
 醜の捕手の來りなば
 あらぬ荒びをせにやならぬ
 早く進ませ給へかし
 ヤスダラ姫の一行に
 全く神の引合せ
 言葉に従ひ高照の
 妾は後よりセイランの
 やがて再び巡り合ひ
 魔神の荒ぶ荒野原
 右守の神に仕へたる
 又もや一汗心にも
 事なき中に一刻も
 尊き神の御前に

真心誓ひて宣りまつる

あゝ惟神々々

御靈幸はひましますよ

と歌ひ終れば龍雲は二人の歌に答へて又歌ふ。

龍雲 「あゝ有難し〜」

尊き神の御教に

従ひまつる我々は

三五教の神司

汝が命の宣り言を

如何でか否みまつらんや

仰せに従ひ今よりは

心の駒に咎をうち

虎狼の吠に猛る

山路を分けていそ〜と

高照山の岩窟に

我等一行三人つれ

勇み進んで登りなん

黄金姫よ清照の

姫の命よ我々が
 喪なく事なく高照の
 如何なる枉津の現はれて
 三五教にて鍛へたる
 寄せ来る敵を悉く
 神のまします御舎に
 神の心に見直して
 あゝ惟神 々々
 母娘二人の神司
 枉の身魂を悉く
 行く手を守り給ひつゝ
 岩窟に進ませ給へかし
 姫を惱ますことあるも
 生言靈を打ち出して
 言向和し北光の
 送りて行かん惟神
 心を安くまませよ
 神の御靈の幸はひて
 イルナの都に上りまし
 生言靈に言向けて

セイラン王の身の上を

守らせ給へ大神の

御前に清き真心を

捧けて慎み願ぎまつる

あゝ惟神 々々

御靈幸はひまませよ」

リーダーは又歌ふ。

リーダー「黄金姫の神司

清照姫の宣傳使

雪か花か云ふ様な

容色も形貌も美しき

清き心の汝が命

北光神の御宣言

我等三人に限もなく

宣らせ給ひし尊さよ

我等一行三人は

汝が命の御教を

力に頼み勇ましく

高照山の岩窟に

進みて神の御恵みを
 姫の命の身の上を
 假令天地は變ることも
 ヤスダラ姫の身の上は
 二人の司よ、いざさらば
 お伴に仕へまつりつゝ
 汝が命は潔く
 イルナの都に至りまし
 王の身邊守りませ
 慎み敬ひ二柱

蒙りまつりヤスダラの
 保護しまつらん我心
 リーダーの僕のある限り
 必ず案じ給ふまじ
 我はこれより兩人の
 高照山に向ふべし
 照山峠を踏み越わて
 嚴の言靈打鳴して
 天地の神の御前に
 神の司の成功を

慎み敬ひ願ぎ奉る
 御靈幸はひましくて
 リーダーの姿を現はして
 松、竹、梅の潔く
 あ、惟神 々々

あ、惟神 々々
 再び汝の御前に
 大成功を祝ふ日を
 堅磐常磐に願ぎ奉る
 御靈幸はひましませよ」

こゝに五人は各述懐を語り別れを惜み乍ら三人は高照山へ、二人は照山峠を野嵐に吹かれ乍らエチ／＼と登り行く。

(大正一一、一一、一一、舊九、二三、北村隆光録)

第二章都入り(二二六)

黄金姫清照姫は、三人の一行を高照山に遣はし、肩の重荷を卸すやうな心持になつて、さしみに喰しき急阪をエチ／＼に登り行く。漸くにして頂上に辿りついた。此處にはユーフテスと云ふ右守の神の家老を勤めて居る不誠忠無比の男が二三人の家の子を引きつれ、神の告によつて黄金姫母子の來る事を知り案内と迎へを兼ねて登つて來た。ユーフテスは、二人の峠の頂上に佇み、四方の景色を眺め息をやすめて居るその傍に恭しく頭を下けながら進み寄り、

ユーフテス「一寸物をお尋ね申しますが、私はイルナの都の右守の神の館に家老職を勤めて居ります、ユーフテスと申すものでありますが、若しや貴女様は三五教の宣傳

使黄金姫様、清照姫様の御一行では御座いせんか。イルナの都はバラモン教の教をもつて民を治むる國で御座いますれば、三五教の貴女様をお迎ひ申すと申し上げては怪しく思召さるゝで御座いませうが、決して汚き心でお迎ひに參つたのでは御座いせん。何卒お名乗下さいませぬか」

黄金「ヤア其方はイルナの國の右守の神様の館に仕ふるユーフテス殿か。それは御苦勞であつた。お察しの通り私は黄金姫、清照姫の母子で御座います。王様の御身邊はさうで御座いますかな」

ユーフテス「ハイ有難う、唯今の處では先づ御無事で御座いますが、何時大風一過有名なるイルナ城も破壊するかも知らない危機に類して居ります。實にイルナの都は暗雲低迷豪雨臻らんとして先づ其窓を鎖すべき眞人が御座いせんので、王様は申す

も更なり、忠義にはやる眞人達は夜も碌々に寝られず、心を痛めて居ります。右守の神が放つた探偵は縦横無盡に横行潤歩し、大きな聲で物も碌に云へない云ふ有様で御座います。何卒御推量下さいまして貴女の神力によつてイルナの國の危難をお救ひ下さいませ」

黄金「反問苦肉の策を弄し、大それた野望を遂げんとする悪人原の巢窟なればうっかり高い聲で物を言ふ譯にも往きませぬ。此處は山の頂きなれども、矢張悪神の靈は我等一行を遠く巻いて居りますれば、込み入つた事は申されませぬ。何事も私の胸にあれば御安心なさいませ」

清照「貴方がユーフテスさんでムいましたか。御苦勞でしたなア、これから都迄はまだ餘程の道程がありますか」

ユーフテス「ハイ、もはや十里足らずで御座りますれば些しく急ぎますれば、今晚の四つ時迄には到着出来るでせう、丁度夜中に御入城下さる方が安全でムいませう」
斯く話す處へ「オーイ〜」と阪の下から呼ば乍ら登り来る五六人の騎馬隊があつた。三人は何事ならんと訝り乍ら、峠の傍の石に腰打ちかけ、くだらぬ世間話を態と交換して居た。ユーフテスは節面白く唄ひながら踊つて居る。

高い山から谷の底見れば かほちやや茄子の花盛り

とほ云ふもの、これや嘘ぢや 今は紅葉の秋の末

冬の塚となり果て、 木々の梢はバラ〜と

散り敷く木の葉は雨のごと 高照山の紅葉ばも

衣を脱いで丸裸體 老木も若木もふる〜と

標ひ戦く哀れさよ

照山峠と云ふけれや

木の葉は雨に叩かれて

一つも残らず眞裸體

照山峠は忽ちに

なきやま峠となりました

ドッコイ〜〜〜シヨ

と唄つて居る。其處へ五人の騎馬隊が登つて来て三人を眼下に見下し乍ら、

甲「其方は何者なるか」

と大喝した。ユーフテスは態と空呆惚けて手を耳にあてがい首を傾け、

ユーフテス「ハイ何と仰せられますか。此下り阪は酷いかとお尋ねですか。それは〜

随分きつい阪でムいますよ」

騎士「其方は察する所暫く見ゆる。エ、仕方がない。それなる女に尋ねるが、今此處へ

妙齡の美人と一人の下男が通らなかつたか」

黄金姫は態と阿呆けた顔をして

黄金「ハイ、此峠の少し手前で何とも云へぬ美しい女が三人、男が一人に出會ひました
が、私を見るなり、あゝ汚い乞食だと罵りながら此阪を一目散に登つて往きました
何程落魄た乞食だつて矢張り同じ人間ですもの、そんなに輕蔑したものぢやありませんな」

騎士「ナニ女が三人、男が一人とは合點が行かぬ。確に女一人、男一人通つた筈だ。嘘
を申して居るのではないか」

黄金「嘘と思ふなら勝手に思はつしやい。此婆の目には確に女が三人、男が一人だ。併
も素的な別嬪だつた。一体お前は何處から何處に行かしやるのだ。大變景氣のよい

駒に乗つて、あのまあ強さうな事わいのう」

清照「あのお母さん、今往つた綺麗な女の方は、ヤスだとかダラだとか云つて被入しやつたやうですな」

騎士「何、ヤスと云つて居たか、それや確にヤスダラ姫に相違あるまい。踪跡を暗ますために何處かで乞食女でも雇つて來よつたのだなア。ヤア女共よう云つて呉れた。ヤア皆の者一鞭あて、下らうではないか、シャルル様にこれで申譯が立つと云ふものだ」

と下り阪を馬に跨がつたまゝ進まうとする。

ユーフテス「あ、もしく、こんな下り阪を馬に乗つて通らうものなら、それこそ忽ちですぞ、命の惜く無いものは乗つて往かつしやい」

騎士「何、これしきの急阪が苦になるか、騎馬の達人の顔揃ひだ。下り阪になつて馬を下りるやうでさうして此使命が果されるか、サア往かう」

と云ひながら手綱を引き締め、ハイ／＼と矢聲をあげせながら下り行く。

清照「お母さん、神様は都合よくして下さいますなア、もう少しの事でヤスダラ姫様は彼等の一行に捕へられなさる處でムいました。マアお仕合せのお方ですこと」

黄金「ア、さうだなア、これだから神様の御神力は尊くて忘れられんのだ」

ユーフテス「ヤスダラ姫様にお遇ひになりましたか、さうして姫様がこんな處へお出になつたのでせう。テルマン國のシャルルと云ふ富豪の家に嫁いで居られますのだから、お歸りなるなら澤山のお伴がついて居なければならぬ筈、何か變事でも起つたのではムりすまいか」

黄金 「何れこれには譯のあることです。併し乍ら高照山の岩窟に御案内をして置いたから、狼が守つて居るから御心配は入りませうまい」

ユーフテス 「何と仰有います。人々の恐れて寄りつかない高照山の狼の巢窟に、ヤスダラ姫様を御案内なさることは約り殺しにおやりなされたのですか」

黄金 「オホ、、、苟くも人を助くる宣傳使の身としてそんな事があつて堪らうか、

狼だつて誠をもつて向へば至極柔順なものだ。私にも、かうして居るもの、一つ手を叩けば五十や百の狼はすぐ此處へ現はれて来るのだからなア。オホ、、、」

ユーフテスは顔色をサツと變へ足をワナ／＼させながら、

ユーフテス 「ナ、、、何と仰有います、貴女は狼をお使ひ遊ばすのですか」

黄金 「オホ、、、大層慥うて居りますな、私は狼婆と、狼娘の一行だから、お前

も此世が厭になつて死度いと思はしやつたら、ちつとも心配はない狼に喰はして上げる程に喜びなさい」

と態と作り聲をして憎さげに云つて見せる。

清照 「オホ、、、お母さんとした事が、これ程憶病な人をつかまへて威嚇すものぢや

ありませんよ、貴女も餘程腹が悪うなりましたなア」

黄金 「實は今通つた騎士共が此谷口で我々三人の行路を要してキツト待つて居るから、其時手を打つて百匹計り狼を呼びあつめ追つ拂つてやる積りだ。其時このユーフテスさんが、腰でも抜かしては大變だから、今の中にビツクリの修業をさして居るのだ。これ／＼ユーフテス様、何がそれ程恐いのぢや、お前様は王様のためには不惜身命の活動をするに何時も云つて居るだらう、命の惜くないものが何故そんなに

慄ふのだらう。不惜 身命もあまり宛にはなりませんぞや。口ではぎんな甘い事も云へますが、イザ鎌倉と成ると皆逃腰になるのだから困つたものだよ」

ユーフテス 「君のため世のために命を捨つるのなら捨て甲斐があります、狼なごにバリ／＼やられては、それこそ犬死、いや狼死ですからそれこそたまりませんわ同じ事なら君のため、世のため、人間の手にかゝつて死ぬ方が何程幸福だか分りませんからなア」

黄金 「私も人間だから、そんなら御注文通り、一つ殺して見て上げませうかな、それならお前も得心だらう。オホ、、、」

ユーフテス 「ア、、、イルナの都の助け神さんかと思へば、何だ狼婆アさんだつたかエ、曲津の神に騙されたか、残念だ、もう此上は破れかぶれ窮鼠却て猫を食むの譬

の通り、此ユーフテスがいまわの際の死物狂ひの手並を見て置けよ」

と短剣をスラリと引き抜き黄金姫に向つて突いてかゝる。忽ち後の叢よりオーン、オーンと狼の唸る聲しきりに聞え来る、ユーフテスは短刀をバタリと地に落し慄ひ戦き其場にバタリと倒れて了つた。

黄金 「君のため道のためなら命迄

捨つると云ひし人ぞおかしき。

狼の嘯く聲に驚きて

腰を抜かせしやさ男もあり。

口ばかりめでたき事を云ひ乍ら

まさかの時にや肝を潰しつ。

照山の峠に遇ひし二人連れを

狼使ひと聞いて驚く。

ユーフテスの神の司よ村肝の

心を強め起き上りませ」

清照

「我母はユーフテス司に打ち向ひ

醜の言靈放ちたまひぬ。

さりながらユーフテス司聞き召せ

汝が身魂のみ試めしなれば。

此先に醜の司がかくれ居て

我等三人を捕へんと待つ。

其時に汝が命は驚いて

迷はせまじと母の計らひ。

必ずしも悪くな思ひたまふまじ

汝が身魂を鍛わんと思へばこそ。

惟神 神に仕へし我なれば

いかでか人の命とるべき。

世の人を普く救ふ宣傳使

汝に限りて救はであるべき」

ユーフテスは二人の歌を聞いてやつと安心し、フナク腰にウンミ力を入れ杖を力に
立ち上り

ユーフテス 「肝玉が、ぎつかの國へ宿替し

今は藻抜の殻となりぬる。

腰ぬかし膽玉とられユーフテスは

さうして道を歩み往かなん。

これ程に恐いお方と知つたなら

遙々迎ひに来るぢやなかつたに。

逃げやうとあせれど脛腰立たぬ身の

詮術さへもなき涙かな」

黄金姫はユーフテスの腰を二三回撫で擦り天津祝詞を奏上し天の數歌を二三回唱へ上げた。不思議やユーフテスの腰は俄に強くなり、足の慄ひもどまり、今は神靈の感

應によつて百万の敵も恐れんやうな勇猛心が臍下丹田からむらくと湧いて來た。ユーフテスは初めて黄金姫の心を悟り、幾回もなく頭を下け兩手を合せ其親切を感謝した。ユーフテスは元氣百倍し二人の後に從ひ、急阪を下りながら一足々々拍子を取り歌ひ出した。

ユーフテス 「右守の神のカールチン テーナの姫の喉元へ

甘く喰ひ込み一家老と 鰻登りに登つたる

カールチンさんの家の子と 仕へまつりしユーフテス

朝な夕なに身を盡し 心を盡し主のため

勤むる折しも朝夕に 慕ひまつりしセーリスの

姫の命の來訪に 心は忽ち一變し

右守の神に表向き

忠實らしく仕へつゝ

心はやつぱり裏表

セーリス姫の父上と

現はれ給ふ神司

左守の神のクーリンス

助けにやならぬと内々に

右守の神を伴つて

戀の犠牲と知りながら

やつて来たのはウントコシヨ

ヤットコドツコイ耻かしい

これく右守の神さんや

うつかり油断をなさるなよ

此阪路を下るよに

ここに悪魔が潜むやら

何時クレリツと變るやら

人の心は分らない

これを思へば世の中に

恐ろしものは女ぞや

女の魂一つにて

古今無双の豪傑も

智者と聞かぬしユーフテスも

忽ちドツコイ落城した

ほんに恐ろし戀の道

とは云ふものゝドツコイシヨ

今となつては及ばない

改心するのがドツコイシヨ

好いか悪いかウントコシヨ

見當が取れなくなつて来た

つらく思ひ廻らせば

國の柱と現れませる

セーラン王に刃向ふは

矢張り惡に違ひない

さうすれや右守の神司

背いた處でドツコイシヨ

バラモン神の神罰が

俺等に當る筈がない

さう考へりや安心だ

これく申し二人様

足許氣をつけなさいませ

照山峠は國中で

最も険しい阪道だ

獅子さへ越さぬ難所ぞと

世に聞けたるドッコイシヨ

行くに行かれぬ困り場所

道の案内知らずして

偉そに馬腹に鞭をうち

テルマン國よりやつて来た

五人の騎士は今頃は

馬諸共に千仞の

谷間にドッコイ轉落し

頭を摧き肱を折り

ウン／＼うめいて居るだらう

思へば／＼氣の毒ぢや

バラモン教の神様よ

彼等に罪はありませぬ

此先我等にドッコイシヨ

敵對來る其時は

助けてやつて下さるな

私が些つと困るから

ウントコドッコイ／＼シヨ

今行つた騎士の五人連れ

黄金姫のお言葉に

此山口に身をかくし

我等を待つてゐると聞く

ウントコドッコイ猪口才な

其よな事を致したら

神力受けたユーフテス

生言靈を發射して

一人も残らず打ちきため

根底の國の旅立を

ウントコドッコイさしてやる

もしも敵對せぬならば

助けてやつて下しやんせ

梵天帝釋自在天

オットきつこい國治の

立の命の御前に

慎み敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましますせよ」

吾魂は神素盞鳴の生御魂

その神格に充たされてあり

或時は言靈別の神となり

神國別となる事もあり

大八洲彦の命や大足の

神の御魂も吾俱にあり

第三篇 北光神助

第一三章 夜の駒 (二一七)

イルナの都、セーラン王の館の奥の間には、王を始め、黄金姫、清照姫、テームス
レーブ、カルの六人、上下の列を正し、對座し乍ら、ひそく話が始まつてゐる。

王 「黄金姫様、遠方の所夜中にも拘らず、よくお越し下さいました。これで私も一安心致します。貴女は鬼熊別様の奥様蜈蚣姫様、小糸姫様でムいますなア」

黄金 「ハイ、耻し乍ら運命の網にひかれて、さうく夫と別れ、神様の爲に三五教の宣傳使になりました。世の中は思ふ様にゆかないものでムいます」

王 「左様でムいますなア、私も夫婦の道に就いて、非常に悲惨な境遇に陥つて居ります。これでも何時か又神様の御恵に依つて、思ふ様に身魂の會ふたもの同志添う事

が出来ませうかなア。貴女様は最早鬼熊別様と仲よく元の夫婦となつて、神界にお仕へ遊ばすことが出来ませう。私は到底望みがありますまい」

黄金 「親子夫婦が一所に神界に仕へる位、結構な事はありませんが、私の夫は御存じの通り、バラモン教の柱石、私始め娘は三五教の宣傳使、何程神様は一つだと申しても、むつかしい仲でムいます」

王 「決して御心配なさいませぬ。鬼熊別様はキツと貴女の御説に御賛成遊ばすでムいませう。私の今日の身の上は實に言ふに云はれぬ境遇に陥つて居ります。許嫁のヤスタラ姫は奸臣の爲に卻けられ、心に合はぬ妻を押し付けられ、一日として楽しく暮した事はありません。其上奸者佞人跋扈し、私の身邊は實に危急存亡の場合に陥つて居ります。付いては貴女様をお迎ひ申上げ、此危急を救うて頂きたいと存じまし

て、北光の神様の夢のお告げに依りて、數日前より貴女様の此方へお出ましになるのをばお捜し申して居りました。よくマア來て下さいました。今後は貴女の御指圖に従ひ身を處する考へですから、何分宜しく御願ひ致します」

黄金 「貴方は三五の教を信じますか」

王 「ハイ別に信ずるといふ譯ではムいせんが、大自在天様も世界の創造主、國治立尊様も矢張り世界の創造主、名は變れ共元は同じ神様だと信じて居ります」

黄金 「國治立尊様は本當の此世の御先祖様、磐古神王や自在天様は人類の祖先天足彦胞場姫の身魂から發生した大蛇や惡狐惡鬼の邪靈の憑依した神様で、言はゞ其祖先を人間に出して居る方ですから、非常な相違があります。神から表はれた神と、人から現はれた神とは、そこに區別がなければなりません」

王 「あ、それでムいますかなア。私は三五教の奉齋主神たる國治立大神様も、盤古神王様も、大自在天様も、同じ神様で、名稱が違ふ丈だに聞いて居ります。私も固くそれを信じて居りましたが、そう承はらば一つ考へねばなりません。チョツと貴女様母子に見て頂きたいものがムいますから、さうぞ私の籠り場所へお越し下さいませ。妻でも左守神でも誰一人入れた事のない神聖な居間でムいます。チームスよ、レープ、カルと共にここに暫く待つてゐてくれ」

チームス 「ハイ畏まりました」

とさし俯む。王は母子を伴ひ、籠りの室へ進み行く。行つて見れば、可なり広い室が二間並んでゐる。そこには立派に齋壇が設けられ、いろ／＼の面白き骨董品などが陳列されてあつた。床の間の簾を王はクリ／＼と捲上げ、手を拍ち、祝詞を奏上し

始めた。母子も同じく頭を下ゆ、小聲に祝詞を奏上し、終つて齋壇をよく／＼見れば一幅の掛軸が床の間の正面にかけられ、御神酒御饌御水等がキチンと供へられてある。これは常に王が潔齋して神慮を伺ふ秘密室であつた。

掛物の神號をよく見れば、天一神王國治立尊……と正面に大字にて記し、其真下に教主神素盞鳴尊と記し、中央の兩側に盤古神王、搦長彦命、常世神王大國彦命と王の直筆で記されてあつた。黄金姫母子は此幅に目をさめ何とも言へぬ爽快さ驚きの念にうたれ、呆然として其神號を眺めてゐる。

王 「私の信仰は此通りでムいます。お分りになりましたか」

黄金 「オホ、思ひもよらぬ御神徳を頂きました。これではイルナの城も大丈夫、御安心なさいませ。併し乍ら此世の御先祖様でも時世時節には對抗し難く、一度は常世

彦常世姫一派の爲に根底の國までお出でなされた位だから、決して油断は出来ませぬ。貴方の信仰が大黒主の方へでも分らうものなら大變だから、今暫くは發表せないが宜しいぞや」

王 「ハイ、左守神にさへも此室は覗かせた事はありません。誰も知る者はないのですから、大丈夫でムいます」

黄金 「假令此室を覗かぬとも、貴方の信仰が斯うだとすれば、何時とはなしに、貴方の聲音に現はれ、皮膚に現はれ、遂にはかん付かれるものです、如何しても心の色は包む事は出来ませぬ」

王 「貴女様がこゝへお越し下さつた以上は、餘り心配する事も要りません。一寸、これを御覽下さいませ」

と次の間に二人を導く。見ればここにも一寸した床の間があつて、二幅の繪像が掲げられてあつた。黄金姫、清照姫はアツとばかりに驚かざるを得なかつた。それは日頃心にかけてゐる夫鬼熊別の肖像と一幅は神素蓋鳴尊の御肖像であつた。清照姫は思はず、

清照 「あ、これはお父様、大神様」

と言はうとするを、黄金姫は口に手を當て、

黄金 「コレ、清照姫、何を仰有る、これはキツと大黒主様と自在天様の繪姿だ。そんな大きな聲を出す、惡魔の耳に這入つては大變ですよ」

清照 「父上によつた御肖像でムいますなア。ホ、」

王 「私は今迄バラモン神を信仰して、此國を治めて居りましたが、或夜の夢に神素蓋

鳴大神様、鬼熊別命様と現はれ玉ひ、いろく雑多と有難き教訓を垂れさせ下さ
 いまして、それより神命に従ひ、私一人信仰を勵み、時の到るを待つて居りました
 私の夢に現はれたお姿を思ひ出して、自ら筆を執り、ソツとお給仕を致して居りま
 す、鬼熊別様は神界にては神素蓋鳴尊様のお協立になつてゐられます。キット其
 肉体も三五のお道へお入り遊ばすでせう。只時間の問題のみが残つてゐるのだと感
 じて居ります」

黄金姫母子は物をも言はず感に打たれ、嬉し涙にかきくれてゐた。
 セーラン「天地の神の恵を目のあたり

拜みし今日ぞ尊かりけり。
 素蓋鳴神の尊に服ひて

教を守る鬼熊別の神。

鬼熊別神の命は今暫し

ハルナの都に世を忍びますらむ。

時機來ればやがて表に現はれて

三五教の司となりません。

あ、嬉し黄金姫や清照の

神の司に會ひし今宵は」

黄金「來て見れば思ひもよらぬ王の居間に

わが脊の君の姿拜みし。

バラモンの教の御子と思ひしに

摩訶不思議なる今宵なりけり」

清照「千早振る神の光の強ければ

父の命の心照りつゝ。

我父は最早國治立神の

教の御子となりましにけむ。

セーランの王の命よ今暫し

時を待ちませ神のまに〜。

清照の姫の司も今宵こそ

積る思の晴れ渡りける」

黄金

「北光の神の命のかくれます

高照山にぞく進みませ。

高照の山は世人の恐ろしく

噂すれ共珍の眞秀良場。

百千々の狼の群従へて

北光神は王を待ちつゝ。

いざさらばテームス、レーブ、カル三人

後に従へぞく出でませよ」

王

「黄金の姫の御言に従ひて

ぞく立出でむ高照山へ。

吾行きし後の館は汝命

夜の駒

暫し止まり守り玉はれ」

清照「大神の稜威の光に照らされて

道も限なく安く行きませ。

母と子が心を協せ身を盡し

入那の城を暫し守らん」

王「鬼熊の別命の賜ひてし

生玉を汝に奉らむ。

心して披き見玉へ鬼熊の

別命の真心現はれぬ」

と言ひ乍ら、鬼熊別より王に遣はしたる密書を黄金姫に恭しく手渡した。黄金姫は

手早く、封じ目切り、押披いて讀み下せば、左の文面であつた。……………

鬼熊別よりセーラン王に密書を送る。

一、これの天地は天一神王大國治立尊の造り玉ひし神國にして、決して大國彦、
鹽長彦の神達の創造せし天地にあらず。又大黒主はバラモン教の大棟梁として兵馬
の權を握り、大教主の假面を被り居らるれ共、天は何時迄も斯かる虚偽を許し玉は
ず、必ずや翻然の誠に立ち返り、三五教を信従する時あるべし。夫れに付いては神
素盞鳴大神の御攝理に依り、我妻子近々の内に王が館に訪問す可ければ、一切萬事を
打明け、國家の爲に最善の努力をなさるべし。ハルナの都は今や軍隊の大部分は遠
征の途に上り、守り最も少くなり居れり。然るに王に仕ふる右守神より王を廢立せ
んと願書、大黒主の許に來り、大黒主は數千の騎士を、近々差向くる事となりて

れば、イルナ城は實に風前の灯火ならば、吾妻子と共に善後策を講じ、一時何れへか避難さるべし、鬼熊別はハルナの都に止まつて、大黒主を悔る改めしめ、其身魂をして天國淨土に救はん朝夕努めつゝあり。吾妻子に面會の日を期し、一刻の猶豫もなく、安全地帯へ一時身をかくさるべく吳々も注意致します。あ、惟神靈幸倍坐世」

と記されてあつた。黄金姫清照姫は久しぶりに鬼熊別の肉筆の手紙を見て、夫に直接會ひし如く、父に面會せし如く、心勇み、感涙を落とし乍ら、

黄金「あ、之にて何もかも分りました。北光の神様が一時も早く貴方を狼の岩窟へ誘ひ來れとの御命令も、此手紙の文面にて氷解しました。あ、何と神様はどこまでも注意周到なお方だなア」

清照「お父さんに直接お目にかつた様な心持が致します。神様有難うムいます」

と両手を合せ、神素蓋鳴尊の聖像に向つて、感謝の詞を捧げた。

黄金「サアかうなる上は一刻も早く、高照山へ夜の明けない内にお越し遊ばせ。申上げたき事は山々あれど、今はそういふ餘裕もムいません。サア早く〜」

とせき立つれば王は

王「左様ならば、萬事宜しく願ひます」

と先に立ち、テームス等が控わてゐる居間に姿を現はした。王は母子と共に表の居間に立現はれ、テームスに打ち向ひ、

王「テームス、御苦勞だが、早く駒の用意をしてくれ、これから高照山へレープ、カ
ルを伴ひ、出發致すから」

テームス 「ハイ、承知致しました。併し乍ら黄金姫様の御命令に依り、馬の用意はチャ
ンと整へておきました。何時なり共お伴を致しませう」

王 「あ、それは有難い。そんなら、黄金姫様清照姫様、あとを宜しく御願ひ致します」
黄金 「君ゆきていかにけなげなることも

われは筋を守りまらつゝ。

浦安く進み出でませ高照の

山の岩窟に神は待たせつ。

三五の教司はセーランの

君のいでまし待たせ玉はむ」

王 「いづれは黄金姫や清照の

姫命に借く別れむ」

と歌ひ乍ら、慌く表に出で、裏門口より駒引き出し、暗の道を辿りて、高照山の
岩窟指して一行四人は雲を霞と駆り行く。

(大正一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)

瑞 月

今しばし別れの辛さ忍べかし
花笑む春に逢坂の關

第一四章 慈

訓 (二二八)

狼守る高照山の岩窟には主客五人膝を交へて何事か話に耽つてゐる。北光の神は宣傳使の傍鍛冶の名人なれば數多の精巧なる器械を閑暇ある毎に製造し、鑿榭鶴嘴鐵等を造つて岩窟を穿ち、今や入咫の大廣間は幾つとなく穿たれ、難攻不落の金城鐵壁となつたのである。それに數百千の狼は北光の神の恩威に服し恰も飼犬の如くよく其命を守り、且つ人語を解する様になつてゐた。岩窟の間には天之目一箇神を座上に、其右側には竹野姫、少し下つてヤスダラ姫、龍雲、リーダーの順に湯をすゝり乍ら神話に耽る。

龍雲「北光の神様、私も惡逆無道の惡魔に憑依されサガレン王に對し不臣の罪を重ね

已に靈魂は根底の國へ投げ込まれる、所で御座りましたが、貴神の御親切なる御教訓によつて貪瞋痴の夢も覺め、漸く眞人間にして頂きました。一時勢ひに乗じサガレン王の後を襲ふて權利を揮ふた時の苦しさに比ぶれば今日の氣樂さ、樂さは天地の相違で御座ります。體主靈從の慾望にかられ、知らずく身に靈魂を地獄に落してゐるものは決して龍雲ばかりでは御座りますまい。何にかして其迷ひを醒させ靈魂を安樂にさせてやりたいもので御座りますな」

北光「其方は月の國を巡回して來たのだから最早天下の人情はよく分つただらう。隨分世の中は憐れむべきものが多いだらうな」

龍雲「はい、仰せの通り何處の國へ參りましても宗教争ひや名利の慾に擱まれて、互に鎗を削る慘状は、まるで地獄餓鬼畜生道其儘の出現で御座ります。丁度以前のセイ

ロン島に於ける龍雲の雛形は到る所に散見せられます。然し乍ら不思議な事には三五教の少しでも息のかゝつた地方は極めて人心平穩寡慾恬淡にして上下相親しみ、小天國が築かれてゐるのを目撃致しまして最も愉快に感じた事も御座ります」

北光

「其方が七千餘ヶ國を巡つた中比較的治まり難い處は何處何處だと思ひましたか」

龍雲

「はい、随分澤山で一々申上げる譯には参りません。然し乍ら第一にカルマタ國、

第二にイルナの國等は今や大騒亂の勃發せんとする間際になつてゐる様で御座ります。カルマタ國は東北に地教山を控へ、地教山には三五教の神柱が誠の道を守つて附近の人民を教養して居られる。そこへウラル教の常暗彦が現はれて本據を構へ、間隙あれば地教山を併呑せんと企んでゐる。此頃は又ウラル教の勢ひがあまり盛なりと云ふて、ハルナの都の大黒主が大足別將軍に數多の軍隊を引率せしめ攻め來ると

の飛報頻りに來り、人心恟々たる有様で御座ります。次にはイルナの國のセーラン王に對する嫉視反目に月に加はり、正義派と不正義派とが斷わす暗闘をつゞけ今にも右守の神は大黒主の威勢を頼みイルナの王を放逐し、自らとつて代らんと計畫中だこの城下の人々のとりぎりの噂、何時イルナの都は戰塵の巻と變るやも知れぬこの事で御座ります。何とてかして此慘狀を未發に防ぎ度いと存じ、此龍雲も都下を徘徊致して宣傳歌を歌ひまはりました所、右守の神のカルチンが部下に壓迫され、已に生命までとられんとせし所、不思議にも何處ともなく狼の群、白晝に現はれ來り、咆哮怒號して敵を追ひ散らし、煙の如く姿をかくしました。其機を窺ひ一目散に都を逃げ出し照山峠を越えてスタク／＼歸り來る途中蓮川の邊に於てヤスダラ姫様主従に出會ひお二人様の危難を救ひ、後になり先になり見わつ、かくれつ

照山峠の麓まで送つて来ました所、三五教の黄金姫様母娘に出合ひ、一時も早く北光彦の神様の御命令だから高照山へ参れどのお言葉、取るものも取りあへず姫様のお伴をして此處迄参つたもので御座ります。實に危険至極の世の中となつて参りました」

北光 「成る程、それは御苦勞であつた。此館は猛獸の眷族數多守り居れば天下第一の安全地帯だ。ヤスダラ姫殿、御安心をなされ」

ヤスダラ 「はい、有難う御座ります。女の道を踏外した妾をお咎めもなくお助け下さいまして、何とも恐れ多くて申上様も御座りません。何卒宜しく今後の御教養を偏にお願ひ申します」

北光 「随分ヤスダラ姫様、貴女も悪人共の慾望の犠牲となつて苦しみましたな。身魂の

合はぬ夫を持たされ、晝日々不愉快をお感じになつたでせう。御心中お察し申します」

と情ある言葉にヤスダラ姫はヤツと安心し、嬉し涙を袖に拭ひ乍ら、

ヤスダラ 「思ひもよらぬ御親切なお言葉、有難う御座ります。何を隠しませう、妾は

イルナの都の左守の神クーリスの長女と生れセーラン王様の許嫁で御座りました所が、ハルナの都の大黒主様に諂ふ右守の神カールチンの爲めに遮られ、種々難癖をつけられた擧句、テルマン國の毘舎が妻とせられ、今日まで面白からぬ月日を送つて来ました。今貴神のお言葉の通り身魂が合はないのか存じませぬが、夫のシャルルに對し少しも愛の念が起らず、夫も亦妾に對して至極冷淡、路傍相會ふ人の如く夫婦としての暖味は夢にも味はつた事は御座りませぬ。妻として夫に對

し愛を捧ぐるが道なれども、如何したものが其心が湧いて來ませぬ。勿体ない事乍ら明けても暮れても親の許嫁の夫セーラン王様の事が目にちらつき、お聲が耳に響き、王様の事のみ夢現に戀ひ慕ひ、心に罪を重ねて居りました。所へ右守の神の妻テーナ姫が夫の館に右守の神の使者として現はれ來り、妾に對し無理難題を吹きかけ、夫のシャルルを威喝して遂に獄舎を造り妾を投げ込み、非常な虐待を致すので御座ります。妾は最早運命つきたりと覺悟を極め、涙にくる、折しも、雨風烈しき夜半、これなる忠僕リーダーが獄舎を打破り妾を脊負ひ暗に紛れて此處まで漸う、つれて來てくれました。之も全く神様のお蔭と龍雲殿の御保護で御座ります。最早此世に望みは御座りませぬが、せめて一度父のクーリンスや妹のセーリス姫に面會し度う御座ります。又なる事ならば一目なりとも王様のお姿が拜み度く存じます

それさへ出來れば最早死んでも怨みは御座りません」

と身の上話にホロリと涙を落し差俯むく。

北光

「それでスツカリ事情は分りました。やがて親兄妹は申すに及ばずセーラン王様に會はせませう。さうして屹度身魂同士の夫婦だから肉體の上でも夫婦となつてイルナの都の花と謠はれ遊ばす様に守つてあげませう。其手筈は已に此方に於て神示のもとに行はれつゝありますから御安心なさいませ」

ヤスダラ

「左様な有難い事になりませうかな。そんな事が出來ますならば妾を初め親兄妹はどれほど喜ぶか知れませぬ。王様も嘸御満足を遊ばすで御座りませう」

竹野

「ヤスダラ姫様、貴女もこれから神様のために餘程御苦勞を遊ばさねばなりませんぞや。妾も随分若い時は両親に別れ、淋しい月日を送りましたが、風の便りに父の

命は高砂島に在しますと聞き、姉妹三人が色々艱難苦勞を致しまして、珍の都を立ち出てエデンの川邊へ進み行く折しも、悪者共に取巻かれ、困りきつて居る所へ月照彦様の御化身照彦と云ふ筋の僕が追つ掛來り危難を救ひ呉られました。それより父の在します珍の都へ主従四人訪ねて参り、ヤレ嬉しやと思ふたのも束の間、木花姫命様の化身なる珍山彦の神に導かれ戀しき父の都を後に、テルの國にて照彦に別れ、それより船に乗つてアタルの港へ上陸しヒル、カルの國々を姉妹三人離れぐに宣傳を致し、ウラル教の魔神鷹依別の目付に追ひ捲られ、情ある春山彦の館に隠され漸く危難を逃れ黄泉平坂の戦ひに参加致しましたが、随分種々の神様のお試しに會ひました。それより又アジアに渡り所々方々宣傳に廻るうち神素蓋鳴大神様のお媒酌によつてコーカス山に於て北光の神様と結婚式を挙げましたが、そ

れから長い間夫婦同居した事もなく、お道の爲め活動をつゞけ、此頃漸く夫婦が一所に斯うして御用を勤める様になりました。最早夫も年が寄り、妾もこんな婆になつて了ひました。オホ、、、」

と涙をかくして笑ひに紛らす。

ヤスダラ姫は竹野姫の話に感じ、且つ自分の苦勞の足らぬのを恥かしく顔赤らめてオゾ／＼し乍ら、

ヤスダラ「左様でりましたか、人間と云ふものは仲々容易な事で一生を送る事は出来ませんな。妾等は貴女の事を思へばお話になりません。少しの忍耐もなく夫の牢獄を脱け出し、ノメ／＼と親兄妹や思ふ夫を慕ふて逃けて歸つて來た心の穢さ、恥かしさ、實に汗顔の至りでります」

北光 「ヤスダラ姫様、御心配なさいませぬ。貴女はこれから神界のため御活動遊ばすのだ。人の一生は重荷を負ふて険しい山坂を登るやうなものです。何時険呑な目に遭ふやら、倒れるやら分りませぬ。そこを神様の御神力で助けられ、波風荒き世の中を易々と渡るのですよ。さうして自分の身を守り乍ら神様の珍の御子たる天下の萬民に誠の道を教へ諭して天國に救ひ靈肉ともに安心立命を與へるのが神より選まれたる貴女方の任務だから、如何なる艱難辛苦に遭ふとも決して落膽したり怨んだりしては爲りませぬ。何事も此世の中は人間の自由には木の葉一枚だつてなるものではない。みんな神の御心のまに／＼操縦されて居るのだから、如何なる事が出て來ようとも惟神に任し、人間は人間としての最善の努力を捧ぐれば宜いのです。此龍雲さんだつて初めは随分虫のよい考へを起し、得意の時代もあつたが忽ち夢は覺め

て千仞の谷間へ身を落した様に見すほらしき乞食までなり果て、此處に飄然として天地の誠を覺り、諸國行脚をなし、今は完全な神司となり御神力を身に備ふるやうにお成りなされたのですから、人は如何しても苦勞を致さねば誠の神柱にはなる事は出来ません。此北光の神が都牟刈の太刀を鍛ふるにも鐵や鋼を烈火の中へ投げ入れ、金床の上に置いて金槌を以て幾度となく鍊り鍛へ叩き伸し、遂には光芒陸離たる名刀を鍛へる様なもので、人間も神様の鍛鍊を経なくては駄目です。一つでも多く叩かれた劍は切れ味もよく匂も美はしき様なもので、人間も十分に叩かれ苦しめられ、水火の中を潜つて來ねば駄目です。これから此北光の神が貴女の戀ふるセーラン王に面會させますから決して安心をしてはなりませんぞ。我々夫婦の如く互に手配りをして誠の道に盡さねばなりません。いつ迄も若い身を以て天下擾亂の

此場合、夫婦が安樂に情味を樂しむと云ふ事は出来ませぬ。生者必滅會者定離、別離の苦しみは人間は愚、萬物に至る迄免れ難き所、此點を十分に御承知を願つておかねばなりません。やがてセーラン王は二三の忠誠なる僕に守られ、此處にお出でに成りませう」

ヤスダラ 「はい、有難うムります。何から何まで御親切の御教訓、屹度肝に銘じて忘却致しません。否何事も神様の仰せを遵奉致しまして天晴れ神柱と鍛へて頂く覺悟でムります」

竹野 「ヤスダラの姫の命の言の葉を

聞くにつけても涙ぐまる、。

勇ましき汝が御言を聞きしより

竹野の姫の胸も輝く」

ヤスダラ 「ありがたし北光神や竹野姫

御言のまゝに道に仕へん。

セーランの王の命の今此處に

來ますと聞きて胸轟きぬ。

相見ての後の心に比ぶれば

今の我こそ樂しからん」

北光 「セーランの王の命は今此處に

北光神の住家訪ねて。

惟神 神の御手に導かれ

妹脊の山の谷を行くかな」

龍雲「打仰ぎ空行く雲を眺むれば

人の行末思ひやられつ。

高照の山に棲まへる狼も

夫婦の道は忘れざるらん。

妻となり夫となるも天地の

神の結びし縁なるらん」

リーダー「はるくくテルマン國を立出で、

姫を守りて今此處にあり。

テルマンのシャルルの館を出でし時

行末如何に思ひなやみし。

かく計り尊き神に會ひし上は

世に恐るべきものあらじぞ思ふ。」

惟神 神の御言を畏みて

世人の爲めに身をや盡さん」

斯く歌ひ終る時しも俄に聞ゆる蹄の音カツ／＼と岩窟内迄響き来る。

北光「ヤア、あの足音はセーラン王の一行ならん、龍雲殿お出迎へ頼むぞや」

ヤスダラ「わッ！」

龍雲「畏まりました」

と身を起し岩窟の入口指して一目散にかけり行く。

(大正一一、一二、一三、舊九、二四、北村隆光録)

瑞月

骸骨となりし亡者が幾度も

出直して来る暗世なりけり

精靈の歡び勇む神の代は

地上に花の匂ふ時なり

第一五章 難問題 (二一九)

セーラン王は、テームス、レープ、カルの三人を從へ蹄の音も勇ましく漸くにして北光神の岩窟の館についた。龍雲は岩窟の口迄出で迎へ、

龍雲「貴方はセーラン王様でムいますか、お待ち受け致して居りました。一寸暫くお待ち下さいませ。主人に申上げて來ますから」

セーラン「何分宜敷く頼み入る、我々は黄金姫、清照姫様の指揮に従ひ、暗夜を幸ひ、イルナの城より忍んで参つたものでムる。さうぞ北光彦神様に宜敷くお取なしを願ひます」

龍雲「ハイ承知致しました。暫くお待ちを願ひます」

と其儘踵をかへし奥深く進み入り、北光神の前に手を支へ、

龍雲「正しくセイラン王様のお出で御座いました。さちらへお通し申ませうか」

ヤスダラ姫の顔色は嬉しさで恥かしさで驚きでにサツと變つた。北光神は欣然として

北光「只今御面會致すから、第三號室に御案内申して置け。さうしてお湯でも差上げて暫くお待ちを願つて置いて呉れ。我は是より神殿に参り、神様にお禮を申上げて来る。サア竹野姫、ヤスダラ姫殿奥へ参りませう」

と先に立ち神前の間に進み行く。龍雲は表へさしてセイラン王を迎ふべく駆け出す。

リーダーは後に兩手を組んで獨り言、

リーダー「何と怪つ体な事があるもんだなア。狼の山へ怖々やつて来て見れば、澤山の狼は犬のやうに柔順しい。そこへ北光神様のやうな一つ目のお爺さん、花を

欺くやうな奥様、妙なコントラストだ。ヤスダラ姫様をお伴して、此處へやつて來

たと思へば、セイラン王様がお出なさることは何とした不思議の事だらう。定めし姫

様も王様のお顔を御覽になつたら、ビックリと喜びで妙な顔をなさるだらう……

生者必滅會者常離、浮世の常とは云ひながら、親と親との許嫁、怪しき雲に隔てられ

國と都に引き分け、朝な夕なに君の御身の上、案じ暮して居りました。今日は如何

なる吉日ぞ。焦れ／＼た其人に、所もあらうに狼の住む高照山の岩窟でお目に懸

らうとは神ならぬ身の知るよしもなく、泣いて計り居りました。思へば／＼有り難

や尊き神の引き合せ、天の岩戸も開けたやうな、私や心になりました。嬉しいわい

ななつかしいわいな……と人目も耻ぢず絶りつき、互に手に手を取り交はし、泣き

叫ぶこそ、可憐らしき。チャン、チャン、チャン、と云ふ場合だ。俺も一度こんな

ローマンスを味はつて見度いものだ。青春の血に燃ゆる壯者と美人、こんなに嬉しからうぞ。互に焦れ慕ふた男と女が思はぬ處で遇ふのなもの、これが嬉しうのうて何とせうぞいのう……。アハ、、、目出度いく、おい出度い。北光彦神様も苦勞人だけあつて仲々粹が利いて居るわい。こんな事分つた宣傳使にお仕へするのなら、俺だつてこんな苦勞だつて厭ひはしない。岩より固い千代の固めを、千引の岩の岩窟の中で、北光神様の目ぢやないが、確りカタメと云ふ洒落だな。ウフ、、、」斯かる所へセイラン王一行を三號室に導き置き、北光神に報告すべく走つて來た龍雲は、リーダーの唯一人面白さうに笑ふて居るのを見て、

龍雲

「おいリーダー、何を笑つて居るのだ。お客さんが見たのだ。此箱は御夫婦二人きりでお手が足らんのだから、早くお客さんのお湯でも汲んでお世話をしなにか、

氣の利かぬ男だなア」

リーダー「私だつて今來たばつかし、お客さんぢやありませんか。客の分際として、そんな勝手な事が出来ますか。北光神様のお許しさへあればお湯も汲みませう。どんな御用も致します」

龍雲

「エ、何と氣の利かぬ男だなア」

リーダー「餘り氣が利いたり、融通が利くとし、島の神地の都で失敗なつたやうな事が出来ずからなア。まあヂツクリと落付きなさい。「大鳥は翼を急がぬ」と云ひまして、度量の大きいものは、さう小さい事にこせつきませんからなア。エヘ、、、」

龍雲

「大男總身に智慧が廻り兼ねと云つて、胴柄ばかり大きくつて、間に合はぬ男だ

なア。お前のやうなものは仁王さんにでもなつて門の入口にシヤチコ張つて居るのが適當だ」

リーダー「モシ龍雲さん、貴方に誠があるなら、不言實行ですよ。師匠を杖にするな。人を力にするな、とは三五教の教理だ、道々お説教をなさいましたなア。私はよく覺わて居りますよ」

龍雲「エ、仕方がない、そんなら是から不言實行だ」

と第三號室に向つて走り行かうとするのを、リーダーは裾をグツと握り、

リーダー「モシ、龍雲さん、不言實行だ、今仰有つたが、それがもはや不言實行の原則を破つて居られるでは無いませんか」

龍雲「エ、入釜しい、俺のは特別製の准不言實行だ」

と云ひ乍ら袖振りきつてセーラン王の室に走り出で、恭しく兩手を支へて、

龍雲「セーラン王様、折角のお越しえらうお待たせ申しまして不都合でムいました。併し乍ら私もたつた今初めて参つたもの、まだ席も温かくなならない位でムいます。と云つても最早や二三日は暮れましたが、此處の召使と云ふ譯でもなし、貴方に一足お先に参つた珍客でムいますから、どうぞ悪からず見直し聞直し下さいませ」

セーラン「イヤ有難う、北光神様はまだお越しになりませぬか」

龍雲「今お見ねになるでせう。暫くお待ちを願ひます」

王「高照の嶮しき山に登り來て

岩窟の中に身をやすめぬる。

北光の神の命に遇はんにて

神のまに／＼訪ね來りぬ」

龍雲「今しばし待たせたまへや神司」

やがては此處に北光の神。

生身魂清く直なる竹野姫

妻の命も共に在ませり。

汝が命慕ひたまひし姫神に

遇はせたまはん時は迫りぬ。

ヤスグラの姫の命は君を慕ひ

朝な夕なに祈りたまへり」

王「摩訶不思議、ヤスグラ姫が如何にして

これの岩窟に潜み居らん」

龍雲「何事も神のまに／＼人の身は

まもられて行く夢の世なれば」

斯く語り合ふ處へ、北光神は衣服を着替へ威儀を正して入り來り、王に向ひ、

北光「私は北光彦でゐる。能くまア此岩窟に入らせられました。黄金姫、清照姫殿は機

嫌よくして居られますかなア」

セーラン「初めてお目にかゝりました。貴方は三五教にて御名も高き北光神様、一目其

お姿を拜しまして、誠の生神様にお目にかゝつたやうな心に力がつきました。何卒

今後の御教導をお願ひ致します。御存じの通りイルナの城は危急存亡の場合で、

ますれば、黄金姫様の御指圖に従ひ、卑怯未練は承知しながら神命を奉じて微行

致して参りました」

とや、涙ぐむ。

北光「アハ、、、決して御心配遊ばすな。何事も神様の御経綸に任すより道はありません。これから我々は神策を施しますから氣を落着けてゆつくりとなさつたがよろしからう。此處は御存じの通り、狼の巢窟、如何なる英雄豪傑も此岩窟ばかりは窺ふ事は出来ませぬ。御安心なさいませ。併し乍ら、貴方に一つお尋ねして置かなければならぬ事がムります。それは餘の儀ではムらぬ、貴方にはサマリー姫と云ふお妃があるでせう、其妃は今後どうなさるお積りですか」

王は此言葉にハタとつまり如何答へんと心を惱ませ、默然として暫しが間さし俯むいて居る。

北光「一旦妻と定つたサマリー姫をこの迄も連れて共にく苦勞をなさるお考へでせうなア。萬一貴方の戀慕ふ立派な女が此處に現はれたとすれば、貴方は自分の意志に従つて其女を妻に致しますか。但は一夫一婦の規則を守つて氣に入らぬサマリー姫をこの迄も愛して行きますか。それを聞かして頂き度い。北光神にも少し考へがムるから」

王は如何は答へんかとつおひつ思案に暮れながら、漸くにして

セーラン「ハイ何事も惟神に任せよう。心の曇つた我々、どうしてよいか判断がつかませぬ。どうぞ貴方のお考へを承はり度ふ御座います」

と甘く言葉をそらし北光神に其解決をおつつけてしまった。

北光「オツホ、、、隅にもおけぬ王様だなア、こゝろ北光が申せば御返答にお困りだら

うと思つたが、反對にこちらへ大問題をおつかぶせられ、北光神も聊か迷惑を致しました」

セーラン 「何も彼も御存じの貴方の前で包み隠すも無駄でムいます。又私も心にもなき事を申上げ度くはありません。お叱りかは存じませぬが、實の處はサマリー姫はさう考へても厭でく仕方がありません。何かの策略あつて右守神が私の許嫁を追ひ出し、其娘を無理に押しつけたのでムいますから、要するに愛の無き縁談でムいます。かゝる虚偽的愛の夫婦は却て神様に對し濟まないやうな氣も致します。又一方より考へて見れば今日の處サマリー姫は心の底から私に對して愛慕の念を起して居るやうでムいます。それ故に日夜心を痛め、さうしたらよいかと迷ふて居る次第でムいます。サマリー姫一人のためにイルナの城の興亡に關する問題ですから實の處

決し兼ねて居ります」

北光 「何と氣の弱いお方だなア。なぜ男らしく、初めにボンと斷りを云はなかつたのですか。貴方はセーラン王の位地に戀々として、心にもなき結婚を承諾したのでせう。貴方には親の許した許嫁があつた筈、なぜ先約を履行なさらなかつたか。それから第一間違つて居る。兩親の許した許嫁を無視して途中から變更するといふ事は第一孝の道に缺けて居る。假令如何なる事情があらうとも父王様の命令を遵守し一身を暗してなぜ争はなかつたのですか」

王 「そのお言葉を聞いて今更の如く自分の薄志弱行を悔みます。實の處は何と申して天則違反か知らねどもヤスタラ姫と夫婦となる事を得ば、たとへ王位を捨て、も悔ゆる處はムいません」

北光 「ウフ、、、。さうさう、本音を吹きましたな。それが偽りのなき貴方の真心だ。併し乍ら、其ヤスダラ姫様が、夫に一回なりとも交はりを結んで居られたならばどうなされますか。それでも貴方は喜んで夫婦になるお考へですか。もしヤスダラ姫に對し貞節を守り、一回の交はりもして居なかつたとすれば兎も角、さうでもかまはぬ添ひさへすればよいと云ふお考へなれば、貴方はもはや人間ではない戀の奴隷と云ふものだ」

王

「ハイ、仰せの如くヤスダラ姫にして左様な事がありとすれば私は斷念致します。併し彼に限つて決して左様な事はあるまいと思ひます」

北光

「今貴方に遇はせたいものがある。驚かないやうにして下さい」

王

「それはヤスダラ姫でムいますか。何とかなしにそのやうな氣分が浮んで参りまし

た」

北光 「アハ、、、。矢張り蛇の道は蛇だなア」

(大正一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)

瑞 月

もろこしの蛸間の山に嵐して

花も果實も跡なく散り行く

神無しの蛸間の山を眺むれば

醜の小草の生い茂るかな

第一十六章 三 番 叟 (二二二〇)

北光の神は竹野姫、龍雲、テームス、リーダー等を引つれ、氣を利かして一間に引上げて了つた。後にセーラン王、ヤスダラ姫は暫し沈黙の幕をつゞけてゐた。ヤスダラ姫は心臓の鼓動を金剛力を出して鎮靜し乍ら、顔にバツミ紅葉を散らし、覺束な口調にて、

ヤスダラ 「セーラン王様、お久しうございました。御壯健なお顔を拜し嬉しう存じます」と縁に言つたぎり、耻しさうに俯いて顔をかくす。セーラン王は目をしばた、き乍らセーラン 「貴女も随分辛い思ひをしたでせうなア。私もテルマンの國の空を眺めて、空行く雁に思ひを送つたことは幾度か知れませぬ。私の真心は貴女の精靈に通じたで

せうなア」

ヤスダラ 「ハイ、一夜さも王様の御夢を見ないことはありませぬ。今日こゝで貴方にお目にかゝるのは夢の様にムいます。夢を兩人が見て居るのではありますまいか。夢なら夢で、どこまでも醒めない様にあつて欲しいものです」

王 「決して夢ではありませんまい。現實でせう、併し乍ら二人の間は夢よりも果敢ないものでムいました。今北光の神様からいろくゞ御理解を承はり、今後どうしたらよからうかと思案にくれてゐる所です」

ヤスダラ 「假令天律を破つてもかまわぬぢやありませんか。假令一分間でも自分の本能を満足させることが出来れば、死んでも朽ちても構ひません。假令根の國底の國へおとされうとも、貴方と二人手を引き合つてゆくならば、構はんぢやありませんか

か」

ミマサカの時になれば、大膽なは女である。ヤスダラ姫は最早神の教も何も忘れて了ひ、捨鉢氣味になつて、王の決心を煽動したり促してゐる。

王 「成程貴女の心としてはさう思はれるのも尤もだ。私だつて貴女を思ふ心は決して劣りませぬ。併し乍らそこを耐へ忍ぶのが、人間の勤めだ。月に村雲花に嵐、思ふやうにゆかぬは浮世の常、如何なりゆくも神様の御攝理、かうして半時の間でも一生會はれないと思つてゐた相思の男女が會ふて心の丈を語り合ふのも、神様の深きお情、私はこれで最早一生會ふことが出来なくても、決して神様を恨んだり、世を歎いたり致しませんまい」

ヤスダラ 「貴方の戀は實に淡白なものですなア。それで貴方は最早満足なされましたか

エ、情ない、そんな御心とは夢にも知らず、何にかして貴方に巡り會ひ、海山の話
を互に打明け、凡ゆる艱難や妨害に堪へ、假令虎狼の吼へ猛る深山の奥でも夫婦
となつて、戀の本望を遂げねばおかぬと、矢竹心に勵まされ、險香な荒野原をわた
り、イルナの都に逃げ歸る途中、神様の御引合せにてこゝに助けられたのでムいま
す。さうぞそんな氣の弱いことを仰有らずに金剛不壞の大度胸を出して、兩人が
目的の貫徹を計つて下さいませ。貴方にはサマリー姫様といふ最愛の奥様がお控へ
遊ばしてゐるのですから、無理もムいますまい。イヤ妾も迷うて居りました。最早
貴方の心は昔日の心ではムいますまい。誠にすまないことを申上げました。さうぞ
サマリー姫様と幾久しく階老同穴をお契なさいませ。妾は幽界とやらへ參つて、御
夫婦のお身の上を守ります」

と言ひ放ちワツミばかりに王の膝に泣き倒れるのであつた。王はハタと當惑し、今の泣聲がもしや北光の神様のお耳に入つては居ないであらうかと、ツミ立つて隔ての戸を押ひらき、あたりに人のあるか、なきかを查べんとするを、ヤスダラ姫は王の我を見すて、逃げ出し玉ふならんと早合點し、力に任せて王の手をグツミ後へ引いた。王は不意に姫に手をひかれた途端にタヂ〜と二足三足後しざりし、姫の膝に躓き、バタリと其場に倒れ、岩壁に頭を打ち、ウンと一聲人事不省に陥つて了つた。ヤスダラ姫は此態を見るより、

ヤスダラ 「あ、如何せう〜」

と狂氣の如く室内を駆け巡り、王の頭に手を當て、

ヤスダラ 「モシ、王様許して下さいませ。決して貴方をこかさうと思つたのぢやムいませぬ。怪我でムいます。貴方ばかり決して殺しは致しません、妾もキツミお後を慕ひます」

と言ひ乍ら、スラリと懐劍の鞘を拂ひ、つく〜と打眺め、

ヤスダラ 「果敢なきは夢の浮世と知り乍ら

かゝる世ぞは思はざりけり。

戀慕ふ君に會ひしと思ふ間も

泣く〜此世の別れとぞなる。

悲しさは小さき胸に充ちあふれ

泣く涙さへ出でぬなりけり。

ゆるしませ、セーラン王の神司

やがては吾れも御伴に仕へむ。

北光の神の命よヤスダラの

心卑しとさけすみ玉ふな」

と云ひ乍ら、アワヤ我喉につき立てんとする。此時戶外に立つて様子を伺ひるたるリーダーは慌しく飛込み來り、矢庭に姫の懐劍を奪ひ取り、聲を勵まし

リーダー「ヤスダラ姫殿、狂氣めされたか、かゝる神聖なる靈場に於て、無理心中とは何のこゝと、天則違反の大罪となる事をお辨へなさらぬか。そんな御心とは知らず、貴女の御身を保護し、テルマン國を命カラ／＼逃出し、猛獸の猛び狂ふ荒野原をやうく越えて此處迄お伴をし乍ら、勿体なや王様を殺し、貴女も亦こゝで御自害をなさるゝは何といふ情ないお心でムいますか。入岐の大蛇か金毛九尾の悪狐に憑依さ

れ、そんな悪心をお出しなさつたでせう。モウかうなる上は此リーダーが承知致しませぬ。王様の仇を討たねばおきませぬ」

と聲を震はせ、叱りつける様に言ふ。王は「ウン／＼」と呻き乍ら、頭をかゝて起上り、

セーラン「あ、ヤスダラ姫、そこに居たか、何を泣いてゐる。ヤア汝は何者だ。凶器を以て姫を脅迫せんとするか。不届き至極な痴者、許しは致さぬぞ。そこ動くな」
と聲を尖らせ、睨つけられ、リーダーは王の蘇生の嬉しさと誤解の恐ろしさに狼狽へ乍ら、

リーダー「メ、滅相な、こゝ迄お伴して來た姫様を何しに殺しませう。そんな誤解をして、了つちや、此リーダーの立場がムいませぬ。姫様が狂氣遊ばして、貴方様を殺し

自分も自害なざる覺悟だと思ひ、飛込んで、たつた今姫様の短刀を奪ひ、御意見を申上げてゐた所でムいます」

ヤスダラ 「王様、嬉しや氣がつかしましたか、此リーダーは決して悪人ではムいません。どうぞ許してやつて下さいませ」

セーラン 「あ、さうであつたか、誠にすまなかつた。リーダーとやら、全く誤解だから許して呉れ」

リーダー 「ハイ、有難うムいます、お分りになればこんな結構なことはムいません」

セーラン 「こんな騒ぎは北光の神様に知れたら大變だが、もしやお分りになつては居なからうかなア」

リーダー 「へー、スツカリ分つて居ります。北光の神様も竹野さんも、龍雲さ

んも次の間で貴方方二人の御話を耳をすましてお聞になつてゐる……とは申しませぬ……だらうと考へます」

セーラン 「立聞は不道德の極みだ。あれ位の神人がさうしてそんなことを遊ばすものかヤスダラ姫、安心をしたがよからう」

ヤスダラ 「北光の神様は天眼通力を得たる生神様、何程遠く隔たつて居りましても、手に取る如くに御覽になつて居ります。又我々の言も得意の天耳通で一言も洩らさずお聞きになつてをるでせう。あ、耻しいことになつて來た」

セーラン 「北光の神様の天耳通、天眼通が分つてゐるのなら、なぜ其方はあの様な大膽なことを言つたのだ」

ヤスダラ 「妾が言はなくても、北光の神様は心のドン底まで見すかしてゐられますから

言つても云はいでも同じことですワ」

セーラン「耻しいことだなア。イルナの國王も北光神様の前へ出ては象に對する鼠のやうなものだ。いかにもこんなことでは、あの小さい國でさへも治まりさうなことがない。國王だに云つても僅かに五萬や六萬の人間の頭だから、小さいものだ。北光の神様は諸王に超越し、天地の意志を代表なさる生神様だから大したものだ。モウ此上は耻も外聞もいつたものだない、何事も北光の神様の御指圖に任さうではないか」

ヤスダラ「ハイさう致しませう、併し乍ら吾々二人を都合よく添はして下さるでせうか」
セーラン「又そんな事を言つてはいけません、リーダーが聞いてゐるぢやありませんか」
リーダー「王様、此リーダーは血もあれば涙もあり、情も知つて居る圓滿具足な下僕で

ムいます。ヤスダラ姫様の事ならどんなことでも厭ひませぬ。何なと仰有いませ、只一言だつて、御兩人の秘密を洩らすやうな野呂馬ではムいません。シャルルの主人に背き姫様の御意思に賛成して、命がけの仕事をやつて來た位でムいますから、大丈夫です。なア姫様、貴女は私の心をよく御存じでムいませう」

ヤスダラ「ハア、能く分つてゐる。北光の神様の、お前は一つ御都合を伺つて來てくれないか、之から御面會がしたいから……」

リーダー「ハイ承知致しました」

セーラン「此間を立出で、二三間ばかり行つた所で、一寸立ち止まり、

リーダー「何と甘くおまき遊ばしますワイ。久しぶりにお二人が御對面遊ばし、餘り仲がよすぎて死ぬの走るの暇をくれのど、戀仲には有りがちの痴話喧嘩を、面白半分

にやつてムつた眞最中に、俺が氣が利かないものだから、本當の喧嘩だと思つて飛込んだのが間違ひだ。甘く俺をまいて、意茶つきをやらうといふんだなア。ヨシ合點だ。そんなことの氣の利かんリーダーぢやない。そんな頭の悪い呑込みの悪い粗製濫造の頭腦とは違ひますワイ。イヒ、、、さぞ別れて久しき二人の逢瀬、泣いっつ口説いつ、抱いたり、跳たり、つめつたり、叩いたり、思ふ存分久しぶりでイチヤつかして上げやうかい。早く北光神様に御都合伺つて来いなんて、甘い辭令で遠ざけやうといふ賢明な行方だ。コリヤあはて、正直に行くに却て御迷惑になるかも知れぬ。三足往つては二足戻り二足往つては三足戻りオット、そんなことしては何時迄も同じ所に居らねばなるまい。併し乍らそこが粹といふものだ。さぞ楽しい嬉しいことだらうなア。俺も何だか嬉しうなつて來た。ウッフ、、、」

と隧道に停立して、獨り嘸いてゐる。ヤスダラ姫は氣が咎めたか、リーダーが立聞して居つては耻しいと、氣をまはし、戸をカラリとあけて外を覗けば、リーダーは二三間離れた所に停立して、切りに首を縦にふり、横にふり、舌を出したり、眉毛を撫でたりやつてゐる。ヤスダラ姫は細い聲で、

ヤスダラ 「コレ〜、リーダー、何をしてゐるのだ。早くお使ひに行つて来て下さるか。困るぢやありませんか、王様が御待兼ぢやのに」

リーダー 「ハイ、承知致しました。急いで事は仕損ずる。急かねば事が間に合はぬ。あちら立てればこちらが立たぬ。兩方立てれば身が立たぬといふ、誠と情の縮木にかゝり、稍思案にくれにけり……といふ爲体でいます。本當に急いで行つてもいゝのですか、姫様御迷惑になりは致しませんか、正直も結構ですが、餘り融通の

利かん正直は却て迷惑をするものですからなア」

ヤスダラ 「コレ、リーダー、そんな御親切はやめて下さい。お前さん等の下司の戀とは行方が違ひますぞや。阿呆らしい、仕方のない男だなア」

リーダー 「ヘン仰有いますワイ。下司の戀だ……コヒが聞いて呆れますワイ。戀所か腰まで鯛々になつてゐるくせに、戀に上下の隔てなしといふぢやないか、上司の戀も下司の戀もあつたものか、戀はヤツバリ戀だ、リーダーはヤツバリ、リーダーだ」

ヤスダラ 「コレ、早う行いて来て下さらんか、何をブツ／＼言つて居るのだい」
リーダー 「ハイ、何分岩窟の中で水が切れて居るもんですから、鯉も鯛も泳ぎにくうて早速游泳が出来ませぬワイ。戀の海に游泳術の上手な貴女ならば知らぬこと、何だか妙な怪体な氣になつて私の腰迄が……ドツコイ……シヨのドツコイシヨ、フナ／＼

になつて、思ふ様に歩けませんなア」

ヤスダラ 「エ、勝手にしなさい、モウ宜しい。大方法界格氣でもしてゐるのであらう」
リーダー 「アハ、今頃は色の黒き尉の白き姥の、日は照る共、曇る共、鳴

アるは瀧の水、たアきを上りゆく戀のみち、戀に上下の隔てなし、法界格氣をするぢやないが、お前と私と二人の喜びは、ほうかへはやらじ、おんはカタ／＼、エンはカタ／＼と三番叟の最中だらう。エヘ、イヒ、ウフ、と妙な腰をブカつかせ乍ら、北光神の居間へさして、チヨ／＼走りに進み行く。

(大正一一、一一、一二、舊、九、二四、松村眞澄録)

北光神助

二九六

瑞

月

虫喰ひの柱かついで餓鬼連が

高山昇る影の憐れさ

この春は百鳥千鳥萬花

雨に飛たつなり風に散るなり

第四篇 神出鬼没

第一七章 宵 企 み (二二二)

イルナの都の右守の神の館にはカールチン、テーナ姫、ユーフテスの三人が何事か首を鳩めて話し合つて居る。

カールチン 「ユーフテス、テルマン國のシヤールの妻ヤスダラ姫はまだ行衛が分らないか」

ユーフテス 「はい、未だハッキリ分りませぬ。セーリス姫をして様子を窺はしめし所、テーナ姫様がテルマン國へお出になり、毘舎のシヤールをしてヤスダラ姫様を監禁せしめられた後、十日ほどした所で暴風雨の暗夜を幸ひ、姫様に仕へてゐた僕のリーダーと云ふ男が牢獄を叩き破り可成りもなく逃げ失せたと云ふ事です。大方姫様

「其僕との間に何か深い関係があつたのではなからうかとの噂も聞きました。セーリス姫様も大變に姉の不始末を悔んで居ります。昨夜旦那様の御命令によつて照山峠の頂まで参りました處、テルマン國よりシャルルの家の者共馬に跨り、五人連れにてやつて参り、「ヤスタラ姫、リーダーに會はなかつたか」と尋ねました。が然しヒヨツとしたらセーラン王の廻し者ではないかと空惚けて取り合なかつた所、五人の騎士は照山峠を北へくゞ下つて行きます。私はセーリス姫の意見を聞き、屹度ヤスタラ姫は左守の神の父の館へ歸るものと存じましてよくくゞ調べて見ましたが、女らしいものは一人も來ませず、五人の騎士に追つき共々に馬に乗つて都に歸り騎士を一夜宿泊させ、心當りを搜索せよと命じ返しまして御座ります」

カールチン 「折角遠國からやつて來た者を、我に相談もなくほつ返すとはチツと潜越じやないか。なぜ一目會はしてくれなかつたのか」

ユーフテス 「それは濟まない事で御座りますが、然し私は左守の神に知れてはならないと氣をいらち、態におつ返したので御座ります。屹度ヤスタラ姫は照山峠を越へて歸つて來るに間違ひは御座りません。愚圖々々して左守の神の部下等にヤスタラ姫を捕られやうものなら大變で御座りますからな。左守の神に於てもヤスタラ姫の此方へ歸つて來ると云ふ事は略承知をしてゐるさうですから、決して油斷はしてなりません。又昨夜参つた五人の騎士はヤスタラ姫のスタイルをよく知つてゐる者ばかりですから、丁度都合が好いと存じまして照山峠の麓まで差出しまして御座ります」

テーナ 「それは誠にいゝ考へだつた。然し乍らお前の戀女、セーリス姫はヤスタラ姫の

妹だから滅多な事はあるまいな。ウツカリした事は云はれないぞや」

ユーフテス「何を仰有います。同じ姉妹でも心は黒白の違ひ、セーリス姫は決して姉の最良をしたり、親の最良をして自分の戀を犠牲にするやうな悪人では御座りません極めて私のためには大善人で御座りますから」

テーナ「大黒主神様の御命令により日那樣が刹帝利の位に上られ、セーラン王を退隱させて安樂に暮させよとの思召、それも全く我娘のサマリー姫が后になつてゐる餘德によつてセーラン王様の身が安全なのだ。サマリー姫も王様に對しては非常に戀慕してゐるやうだから、如何しても末永く添はしてやらねばなるまい。そこへヤスダラ姫が歸つて來ようものなら、又もや王の心が變り、サマリー姫は戀の破れた結果どんな無分別な事をするか分らず、實に氣の揉める事だ。一時も早くヤスダラの入

城を遮り、之を捉へて人の知らぬ所に監禁し、王との接近を妨げねばなりません。

ユーフテス合點かな」

ユーフテス「はい、萬事萬端私の胸に御座ります。御安心成さいます」

かゝる所へ息せき切つて駈込んだのはマンモスであつた。

テーナ「ヤア、そなたはマンモス、城内の様子は如何だつた」

マンモス「はい、王様は俄の御病氣でお引籠もりと云ふこと、一切面會を禁じられてゐますから詳しい事は存じませぬ。然し夜前何でも女が二人ばかり、男が二三人大奥へ忍び込んだと云ふことを聞きました」

テーナ「はてな、王様の御病氣、そして二人の女に三人の男、大方ヤスダラ姫が參つたのではあるまいかな」

カールチン 「おい、ユーフテス、其方の考へは如何だ」

ユーフテス 「はい、セーリス姫に聞きましたら、俄に王様が御不快なのでバラモン教の修驗者を二三人ばかりお招きになつた云ふことで御座ります。別に大したものじや御座りますまい」

テーナ 「それだ云つて警戒厳しき城下を誰の目にもあまり觸れない様にやつて来る云ふのが怪しいじやないか。ユーフテス、そなたは一應城内の様子を調べて来ては呉れまいかな」

ユーフテス 「はい、畏まりました。左様ならば之から一足、何知らぬ顔して登城致し内部の様子を考へて来ませう。マンモス、其方も来て下さるまいかな」

マンモス 「いや、私は少しく右守の神様に申上げ度きことあれば、何卒後苦勞乍ら貴方

お一人お出でを願ひます。さうして變つた事があれば直様お知らせ下さいませ。右守の神様のお伴をして直様登城致しますから」

ユーフテス 「然らば旦那様、一應様子を考へて参ります」

と云ひ乍ら一生懸命に足を早めてイルナ城の王が館へ進み行く。

ユーフテスの姿が隠れるのを見すまし、マンモスは聲を潜めて、

マンモス 「旦那様、貴方はユーフテスを何處までも御信用なさいますか。私が斯様なことを申上げますのは、何か野心があつて彼を陥穽する様に思召すかも知れませぬが如何も此頃の彼の舉動怪しき點が澤山御座ります。御兩人様、如何お考へ遊ばしませるか」

カールチン 「彼に限つてそんな二心が有らう筈がない。そりや、マンモス、お前の辭目

ではないか。人の噂や表面の活動を見て直に善悪の批評を下すものではない。ユーフテスはセーリス姫を薬籠中のものとし、左守の神の味方と見せかけて、所在神算鬼謀を廻らし内外の様子を限なく探り、我々に報告する探偵の任に當つてゐる男だから、お前の目から見れば怪しく見ゆるだらう。決してそんな心配は要らないよ」

マンモス 「それでも貴方、どうも怪しう御座ります。決して氣を許しては爲りませぬぞ」

テーナ 「ホ、、、氣を宥されんのはユーフテスだつて、マンモスだつて同じことじゃないか。尊き誠の神様を措いて人間の中に一人だつて氣を宥して使へるものがあるか。皆利己主義の集團ばかりだから」

マンモス 「さう圖星をさ、れては返す辭も御座りませんが、然し私は決して敵に欺を通ずる様な悪人では御座りませぬ。然し旦那様は誠に立派なお方ですから、屹度天眼通も開けて居るでせう。よもや裏返り者を信用してお使ひ遊ばす筈もありませんが、私も少し計り安心して居ますが、何だかチツミばかり氣にか、つてなりません第一、昨日迄ビチ／＼して居られたセーラン王様が急病じや云つたり、或は修験者が夜中に招かれてお館へ參るなごとは如何しても合點の行かぬ節が御座ります。こゝは篤と調べなさらねばなりませんまい」

カールチン 「そんなら其方は是から登城してユーフテスに内證で様子を調べて来てくれ」

マンモス 「ヤア有難う、待つてゐました……そのお言葉を」

と云ひ乍らいそ／＼として館を立出で城内さして進み行く。

イルナの城内セーリス姫の居間を慌しく訪ふたのは例のユーフテスであつた。ユーフテスは四邊をキヨロ／＼見廻し乍ら人影なきに安心の胸を撫で下ろし、足音を忍

ばせ乍ら姫の居間に進み入り、耳許に口を寄せて、

ユーフテス「姫様、御安心なさいませ。ハルナの國から大黒主の援軍が澤山に来る所で御座りましたが、近國に一騒動が起つた云ふので軍隊の派遣が暫時遅れる事になりました。此分ならば一ヶ月やそこらは大丈夫です。然し乍ら右守の神は大變に力を落して居ります。それに又ヤスタラ姫様がテルマン國を遁走遊ばしたので、やがて都へお歸りになるだらう。さうなれば大變だに非常に氣を揉んでゐますが、そこも私がうまくチヨロまかし安心をさせて置きましたから之も御安心なさいませ。然し乍ら王様の急病云ひ女の修験者が入り込んだ云ふ事は何かの秘密が潜んで居るに違ひないから、一寸調べて来いカールチンが申ましたので様子を調べて来るに申してやつて来たのです。何云つて返答をしたら宜しいでせうかな」

セーリス「何と面白い事になつて来ましたな。一月ばかり軍隊が攻め寄せて来るのが遅れるとならば其間に、どんな準備も出来ます。これから一つ黄金姫様清照姫様に御相談申上げ、何とか考へをつけませう」

と云ひ乍らユーフテスを伴ひ黄金姫、清照姫の居間に進み行く。

セーリス姫は襖の外より細き聲にて、

セーリス「私はセーリスで御座ります。黄金姫様、清照姫様、お邪魔に参りましたが差支はムりませんか」

黄金「いづく、チツとも差支は御座りません。サア何卒お這入り下さいませ。今朝からお目にかゝらないので如何かとお案じ申して居りました」

と云ひ乍ら座布團を手づから二枚敷いて、

黄金「サアお坐りなさいませ」

「さす、める。セーリス姫は『御免下さいませ』と云ひ乍ら黄金姫と向ひ合せに坐を占め、

セーリス「時に黄金姫様、面白い事になりました。大黒主の軍隊が攻めて来るのは近國に騷擾が起つたため一月ほど遅れると云ふ確報が御座りました。さうして此ユーフテスは右守の神の股肱の重臣でムりますが妾と割りなき戀に落ち、其爲め今は妾の申す事ならばどんな事でも聞いて下さる善人で御座りますから御安心下さいませ。何をお話下さつても大丈夫ですから」

黄金

「オホ、、、セーリス姫様、随分貴女もお轉變ですな。やあ、ユーフテス様ごやう、天下第一の色男さん、オホ、、、此黄金姫も感心致しました」

「ヒボンと春中を二つ三つ叩いた。ユーフテスは得意になり鼻をビョつかせ乍ら、

ユーフテス

「はい、カールチンは私の主人ではムりますれど、神様のお道に反した悪ばかりを企む奴でムりますから、己むを得ず誠の方について居るのでムります。別にセーリス姫様の容色に心魂を蓋かして主人に背き反對をする様な野呂間ではムりませぬ。只正義のため至誠をさ、けて活動を續けて居るのでムります」

「どうまく心の生地を隠さうとつとめてゐる。

セーリス「城内一般に姉のヤスダラ姫が逃げ歸つて、城内に潜んで居るとの噂が立ちましたので、右守の神カールチン夫婦が氣を揉み、サマリー姫の迷惑になるに云つて非常に騒いで居ります。又ヤスダラ姫が歸つて来たならば、屹度王様に智慧をつけて左守の神と共に何をするか知れない。さうすれば折角の企みも水泡に歸すると云

つて騒いでゐるさうですから、一つ清照姫様にお世話になつて姉のヤスタラ姫と化つて貰つては如何でせう。うまいお芝居が出来るでせう。軍隊が攻めて来るには一月も間があるのですから、右守の神をうまく引き寄せて膏をとり、誠の道へ改心をさせたら面白からうと存じまして實は御相談に参りました」

黄金 「オツホ、、、随分貴方も悪戯が好きですな。こんな上下騒がしい時に、そんな氣樂な事をよく思ひついたものですな。いや感心々々、緯々として餘裕の存する其態度、それでなくては大事は遂げられますまい。清照姫、お前暫くヤスタラ姫様に早變りして見たら如何だらうな」

清照 「ホ、、、至極妙案ですな。いやなりませう。一つ竦腕を揮ふて右守の神の肝玉を抜いてやりませう」

セーリス 「早速の御承知、有難うムります。これくユーフテスさん、早く右守の館へ歸つてヤスタラ姫様がお歸りだと報告して下さい。面白い事が出来ますから」

ユーフテス 「それでもヤスタラ姫様は長面、清照姫様は少し圓顔じやムいませんか、右守の神に贖ものだと看破される様な事がムりますまいかな」

清照 「何御心配要りませんものか、女は化物と申しまして作り次第で如何にも化られますよ。これから一つ化粧でもして化てやりませう。明日早朝右守の神様を連れて御出下さいませ。妾の腕前を一つ見せて上げますから、オホ、、、」

黄金 「面白からう」

セーリス 「オホ、、、」

ユーフテス 「エへ、、、此奴あチツと計り面白くなつておいでたわい」

(大正二一、二二、二三、舊九、二四、北村隆光録)

瑞 月

早大出あまり無學者でなければ

今にヨメ(嫁)無いカ、(媽)無いの吾れ

ポンドンの節の破る、恐しさ

聲しきりなり竹商の火災

第一八章 替 へ 玉 (二二三)

イルナ城の奥の間には黄金姫、清照姫、セーリス姫の三人の女、首を鳩めて姦しく喋々喃喃と論戦を戦はして居る。

セーリス 「あのまア、清照姫様のお美しい事、ヤスダラ姫様そつくりですわ、ようまアお顔も御覧になつたことがないのにそれ程似るやうに造れましたねね」

清照 「照山峠の麓でお目にかつたのですよ、其時のお顔を記憶に止めて居て作つたのですから、寫眞に取つたやうなものですわ。何事も新しい女の覇張る世の中ですから清照姫もごうやら新しいヤスダラ姫様になつて仕舞ひました。オホ、、、」
セーリス 「併し新しい世の中が建設されるとかされたとか三五教では仰有るぢやムいま

せんか」

黄金 「新しき天と新しき地とが今度は三五教の神力によつて現はれるのですよ。今迄の天と今迄の地は既に過ぎ去つた今日だ。これから聖城なる新しきエルサレムが地に下り國治立尊が降りたまふて天下萬民を亦新しく生き返らせ玉ふ時代に近づいたのだ。エルサレムの城は四方になつて居て長さも巾も同一である。木花姫命様が天教山より出雲姫命を遣はしたまふて竿を以てエルサレムの城を測量させられた所が一万二千フアアロングあるといふことだ。城の長さも廣さも高さも皆相等しく其石垣は百四十四キユビットあつて碧玉にて石垣を築き、その城は清らかな玻璃の如き純金で造り城の石垣の礎は各様々の寶石で飾られてある。十二の門は十二の眞珠で造られ透き徹るやうな黄金造りの建物計りで目も眩ゆきばかりであります」

セーリス 「新しい天や新しい地が現はれるとはソリヤ大變な事じやありませんか、地異

天變も爰に到つて極まれりと謂ふべしですな」

黄金 「新しき天地とは新しき教會のことで要するに壇安彦、壇安姫の神様が三五教の道場を御開き遊ばしたことを指して謂ふのだ」

セーリス 「天より下り來るエルサレム城といふことは全体何をいふのでせうか」

黄金 「救世主神壇安の神の示し給ふ所の天地の誠、三五教の教説のことであります」

セーリス 「その長さ廣さ高さ相等しくして各一萬二千フアアロングあると仰有つたのは如何なる意味でムいますか」

黄金 「三五教の教説中の眞と善と美とを合一して言つたのだ。また城の石垣といふのはこの教を守護し宣傳する神司のことだ。百四十四キユビットあるとは、三五教の眞

「善と美の三相を悉く擧げて稱讚したもので、宣傳使たるもの、純良なる性相を言つたのだ。また眞珠より成つた十二の門は能導の眞を言つたのだ。寶石より成れる石垣の礎といふのも彼の説教を聞いて立つ所の諸の知識を云ふのである。城を造れる清く透れる玻璃に似たる黄金とは至仁至愛の徳を指して言つたのだ。教説と其の眞と善と美は愛の力に由つて倍々透明となるものだからなア」

セーリス 「そうすると天地が逆様になるぞよといふ三五教の御神諭も矢張右の式で解釋すれば宜いのですかなア」

黄金 「三五教の宣傳使や幹部の中には今でも天と地とが現實的に轉覆するやうに思つて居る人々もあり、御經綸の靈地に眞珠の十二の門が現實的に建つやうに思つて居る人々があるのだからそれで困るのだよ。セーリス様も矢張さう思つて居られませう

なア」

セーリス 「へい、最も現實に立派な宮が立つたり、お城が築造されるものだと思つて居りました」

黄金 「現實的にソナ立派な宮を建てやうものなら、忽ちウラルやバラモンから睨まれて敵き潰されて了ひますぞや。オホ、、、」

セーリス 「オホ、、、」

清照 「本當に神様の教といふものは六つヶ敷いもの、やうな易いものではなア、何故コソナことが肝腎の幹部の連中さんに解らなかつたのでせうかなア」

黄金 「是も時世時節だから仕方ありませんわい、ア、ア、ア」

セーリス 「かうして清照姉様のヤスダラ姫は出來上りましたが、右守神はもう來さうな

「もんですなア。ユーフテスも何を愚圖々々して居るのでせうか」

斯く話す折しも廊下に聞ゆる足音、黄金姫はツト立つて王の籠りし室に身を隠し中より錠を下してしまつた。清照姫、セーリス姫は煙草盆を前に置きスバ／＼と煙を吐いて居る。

そこへユーフテスの案内で足音高くやつて来たのは、カールチン、マンモスの兩人であつた。清照姫は、ヤスタラ姫の聲を一度聞き覚えて居るのを幸ひ作り聲をして、

清照「オ、其方は右守の神カールチン殿先づ御無事で重疊々々、ヤスタラ姫も其方の壯健の姿を見て安心致したぞや」

カールチン「イヤ、姫様のお歸りご承はり早速お伺ひに参るごころでムいしましたが、あまり突然の事で信ずる譯にもゆかず、ユーフテスをして實否を伺はせました處、

正しく姫様のお歸りご聞き、取るものも取敢ず、伺ひました。先づ御壯健で何よりお目出度う」

と氣乗らぬ聲で嫌さうな挨拶をして居る。

清照「コレ右守殿、其方の言葉には極めて冷淡の色が現はれて居ますぞや、御叮嚀にて一ナ姫を遙々ニテルマン國迄使者にお立て下さいまして罪も無い妾をシャルルに牢獄を作らして投げ込んで下さつた御親切は決して忘れはしませんぞや、弱い女と見ても左守の神の血統を享けた刹帝利の女、如何なる鐵牢でもこの細腕で一つ押せば何の雜作もありません、鼻糞で的をはつたやうな牢獄に繋がれて苦しんで居るやうな女だつたらさつぱり駄目ですよ」

カールチン「これは異な事を承はります。テーナ姫は、茲二三ヶ月の間籠の門を潜つ

た事はありません。そりや何かの間違ひか、但は何者かの計略で贖テーナ姫が貴方を苦しめるべく参つたのでせう、左様な事を仰せらるゝからはキツと貴女もこの右守がテーナと腹を合せ、善からぬ事を企んで居ると思はれるでせう。これはく近頃大變な迷惑、さうぞ神直日に見直し聞直し、疑を晴らして下さいませ」

清照 「あの白々しい右守殿の言葉、妾はテーナ殿の顔をよく見知つて居るから、疑が晴らしたくば此處へテーナ殿を連れて來なさい」

カールチン 「ハイ何時でも連れて参るのが本意で御座いますが、昨夜より急病が起り大變苦しんで居るから本復次第お目に懸らせませう」

清照 「妾は其方に對し厚くくお禮を申上げねばならぬ事がある。右守殿決してお忘れではありません下さいませ」

カールチン 「これは又、合點の行かぬお言葉貴女様にお禮を云ふて頂くやうな事は致した覺は無いませんがなア」

清照 「オホ、、、。右守殿も年が寄つたに見て健忘症になられましたなア、妾は親の許嫁でセーラン王様と夫婦と定つて居たのを、其方は御親切にも妾をテルマシンの毘舎の館へ無理に追ひやり、我娘サマリー様を王の妃に押しつけなさいましたでせう。其時の妾の嬉しさ、否腹立しさ、これがさうして寢ても醒めても忘れられませうぞいなア」

と指聲を張り上げて嘔鳴りつけた。

カールチン 「貴女は、一切の経緯を御存じないから、左様な御立腹をなさいますが、これには深い様子のある事であります。セーラン王様や左守の神クーリンスは大黒主

の神様に内々反對なされ、鬼熊別様の御最肩ばかり遊ばす云ふ事がハルナの都に
 知れ渡りこの右守に對して殿しい御質問、お家の一大事を思ひ、イルナの國を救ふ
 べく、又王様を安全に守るべく、貴女にはお氣の毒ながらあ、いふ手段を取つたの
 です。そうして我娘サマリー姫を妃に差し上げたのも大黒主様に安心させる爲の安
 全辦、何卒この右守の神の胸中を御推察あらん事を希望致します」

清照「あ、さうだつたかなア。右守の神の六韜三略の兵法をも知らず、其方を今迄恨ん
 で居たのは誠にもつて耻かしい、女の身の淺幕さ、それでは妾も、是から再び此處
 を立ち出で、サマリー姫様のお邪魔をしないやうに致しますから、御安心なさいま
 せ」

カールチン「貴女は之からテルマン國のシャルの館へ歸つて下さいませるか。さう願へ

ば大變結構でムいますが」

清照「それや眞平御免蒙りませう。又してもギス籠の中へ投込まれますと、叩き潰して
 出て來ねばなりませんからなア、ホ、、、」

カールチン「キット此右守が保護致しまして左様な不心得な事は、シャルに嚴命して
 致させませんから、さうぞお歸り遊ばして下さい、さうして貴女は王様にお遇ひに
 なりましたか」

清照「折角お目にか、らうと思ひ遙々虎口を通れ、こころ迄やつて來ました所、拍子の
 悪い時には悪いものです。王様は俄の大病でお引き籠り遊ばし、何人にも面會せん
 どのこと、妾の心もちつとは推量して下さいませ、右守の神殿、オン／＼」
 と態々に泣聲を出して芝居をして見せた。

カールチン 「王様が御面會せぬと仰有るのに貴女は御命令に背き、たつて會はふと遊ばすのか、何と云ふ不届きな御心でゐる。今日は右守の神、王様に代つてヤスダラ姫を放逐致すから、サ早くお立ち召され」

清照 「セーラン王の許嫁の誠の妻、ヤスダラ姫、今日より汝右守の神に對して退賊を命ずる、エ、汚らはしい一刻も早く退城召され」

カールチン 「これはしたり、ヤスダラ姫は狂氣召されたなア。狂人をお館へ置くは危険千萬、火の用心の程も案ぜらるゝ。イヤ、マンモス、ユーフテス、速にヤスダラ姫を捕縛して座敷牢にぶち込み御静養をさせ奉れ。彼様な事が外部に洩れては王様の御信用に關する一大事だ」

清照 「アイヤ、ヤスダラ姫が命令する。ユーフテス、マンモス、セーリス姫速に、カ

ールテンを高手小手に縛め牢獄に投入せよ。主に向つて無禮千萬の行り方、容赦はならぬぞ。セーラン王に代り固く申つくる」

マンモス 「オイ、ユーフテス、ごちらを聞いたらよいのだらうかなア」

セーリス 「オホ、。一層の事ごちらも牢獄に投げ込んだらどうでせう。喧嘩兩成敗と云ふから、まさか片手落ちの處置も取れますまい」

カールチン 「マンモス、ユーフテス、主人の命令を聞かぬか」

マンモス 「ハイ、聞かん譯では無いません、一寸暫くお待ち下さいませ。俄に便所へ行き度くなりました」

カールチン 「ユーフテス、早く捕縛せぬか」

ユーフテス 「ハイ、捕縛致しませう、併し一つ考へさして下さいませ。セーリス姫様に

篤と相談を致しますから」

清照

「オホ、、、このヤスダラ姫に指一本でも觸れるなら觸れて御覽、面白い活劇が演ぜられ、手足首胴所を異にし、小兒のお玩具箱の人形のやうになります。それでも構はねば、何人に限らず手向ひして御覽」

右守の神は眼を怒らし、清照姫を睨めつけて居る。マンモスはブル／＼と地震の孫宜しくと慄へて居る。セーリス姫、ユーフテスは平然として沈黙を續けてゐる。其處へスタ／＼驅けつて来たのはサマリー姫であつた。

カールチン 「ヤアお前はサマリー姫、こんな處へ来るものでない、控へて居なさい。

何故家に居ないのか、誰人に聞いてやつて来たのだ」

サマリー 「父上そんな氣樂な事が云ふて居れますか。王様は御大病、妻の私としてどう

して知らぬ顔がして居られませう」

カールチン 「其方は此間から夫婦喧嘩をおつ始め、未だ其和解も出来て居ないのだから

話のつく迄早く我館へ歸つて待つて居るがよからうぞよ」

清照 「ヤア珍らしや其方はサマリー姫殿、妾は其方の爲に許嫁の夫に添ふ事も出来ず、

テルマンの國に追ひやられたヤスダラ姫でムいますぞ。日頃の恨を晴らすは今此時

よい處へ出てムつた。サアお覺悟なされ」

と釋十字に綾取つて見せた。サマリー姫は打ち驚きカールチンの腰に喰ひつき、ぶる／＼慄へ乍ら、

サマリー 「もし／＼お父様、どうしませう、助けて下さいませな」

カールチン 「ウン今に待て、ヤスダラ姫をふん縛つて、其方の邪魔を除いてやるから」

と云ひ乍ら、懐中より呼子の笛を取り出し、ヒウ〜と吹き立てた。忽ち十数人の捕手バラ〜と此場に現はれ來り、清照姫に向つて武者振りつくを、清照姫は兩手を擴げ四股を踏みしめながら、

清照「イヤ面白し〜、ヤスダラ姫が武勇の現はし時、木葉武者共、一人も残らず懲して呉れん。サア來い來れ」

と身構へする。美人の雄々しき見暮に捕手は茫然として手出しもせず遠巻に巻いて居る。次の間より戸を隔て、セーラン王の聲、

「アイヤ右守の神、我はセーラン王なるぞ。サマリー姫靜かにせよ。ヤスダラ姫に向つて手向ひ致せば、最早我は許さぬぞよ。サマリー姫、我言を用ひずは唯今限り夫婦の縁を切る。それでもよいか」

と嗷鳴つたのは云ふ迄もなく、隣室に隠れて居た黄金姫の作り聲である。カールチンは王の聲としては少し年が寄つて居るやうである。併し病氣のため體が弱り聲が慄うて居るのであらうと心に極めて了ひ、俄に言葉を柔けて、

カールチン「御病氣中をお氣を揉ましまして誠に濟みません。何卒お許しを願ひます」
サマリー「王様、さうぞ許して下さいませ」

清照「王様、妾はテルマン國から貴方を慕ひ申し遙々参りました許嫁の妻、ヤスダラ姫でムいます。何卒サマリー姫との縁を切り私を貴方の妻として下さいませ。さうしてさうぞ一度尊きお顔を拜まして下さいませ」
と態と涙を流しさし俛く。

次の間より又もや王の作り聲にて

「バラモン教の大棟梁大黒主様は、一夫多妻主義だ、先の妻を逐出して第二の石生能姫を本妻に遊ばし、我々に手本をお示し下さつた以上は、何も憚る事はない、サマリー姫を元の如く本妻と致し、ヤスダラ姫は第二夫人として上女中の取締りに使ふてやるから安心を致せ。右守の神、これに違背はあるまいがなア」

カールチン「ハイ、理義明白なる御仰せ、決して違背は致しません。サマリー姫をこの迄も本妻として愛してやつて下さいますか」

次の間より王の聲、

「サマリー姫の心次第だ、次では右守の神の改心次第だ。もはや余も、刹帝利の職に飽き果てたから、茲一二ヶ月の間に我位を汝に譲る程に、早くサマリー姫を連れ歸り、余が本復を待つて改めて登城致すがよからう。又ヤスダラ姫も、サマリー姫

に余が面會する迄は面會は許さぬぞ。さう心得たらよからう。コン／＼／＼、あ、苦しい、余は咳に艱んで居るから、病氣本復する迄神殿に籠り御祈願を凝らすによつて、右守殿、余が後を繼ぐ用意を萬事萬端に歸つて整へたがよからう」

右守の神は此言葉を聞いて雀躍しながら、

カールチン「ハイ何分宜敷くお願い申します。然らばサマリー姫を一先づ我家に連れ歸り御本復を待つて登城致しませう、何卒一日も早く御本復あらん事をお願い申します。サア、サマリー姫、マンモス、是より館へ歸らう。ヤア者共、余を館へ送つて參れ。ユーフテス、汝はセーリス姫と共に此處に止まり萬事に氣をつけ召され」

と云ひ捨て意氣揚々として館をさしてドヤ／＼と歸り行く。

合せ

「オホ、、、ウフ、、、エヘ、、、アハ、、、」
と笑ひ倒けた。日は漸く西天に姿を没し、双樹の枝に止まつた九官鳥は大口を開けて
阿呆々々と鳴き立て、居る。

(大正一一、一二、一三、舊、九、二四、加藤明子録)

瑞 月

ほの暗き電燈の下にて乙女子が

涙してゐる又も笑つてる

第十九章 當て飲み (二二三)

イルナ川の清流の一部をとり込んだ泉水の中に瀟洒たる茶室が建つてゐる。これは
右守の神の館で、今朝は早朝よりカールチン、テーナ姫、マンモス、サモア姫、ユー
フテスの幹部連、願望成就の前祝として盛に酒酌み交はし浩然の氣を養つてゐる。カ
ールチンはテーナ姫、サモア姫に盛り潰され、王者氣取りになつて豪然と腹の中の泥
を人もなげに吹き立て出した。

カールチンはまはらぬ舌を、顔を擡めて無理に使ひ乍ら、

カールチン(醉泥口調)

「おい、婆アさん……ではない、昔の別嬪のテーナ姫、此方の智

略は偉いものだらう。まるで久惠毘古神か、思(兼神)の様な神智鬼策が臍下丹田か

當て飲み

ら湧いて来るのだからもう、エーン、此神は足は歩かねども天ヶ下の事は悉く知る神なり、奇魂千憑彦の命の再来とは此方の事だ。エーン、今に入那の國、テルマ^ン國を併合して大王國を建設し、テーナ姫でなくてテーナ妃と改名さしてやる。何と婆アさん、嬉しいだらうなア。エーン」

テーナ「あんまり悲しい事もありません。併し乍らそうなるに妾は却て悲しうなるかも知れません。一層今の身の上の方が夫婦睦じく暮らせますから、何程結構だか分りますまい。又大黒主の神様の眞似をして糟糠の妻を無惨にもおつ放り出し、ヤスダ^ラ姫の様な美人を後釜に据わられちや、まるつきり齋に揚豆腐を扱はれた様なものですからなア。旦那様は性が悪いから案じられてなりませんわ」

カールチン「そりや何を吐きんだ。いやしくもバラモン教の道を奉ずる善一筋の此方、そんな没義道な事を致しては其方に濟まんじやないか。いや其方ばかりじやない、此方の心も頓と濟まないから、滅多にそんな事はないから安心をしたが宜からうぞエーン。折角酒がうまく廻つた所へ、そんな取越苦勞を云つてくれると、サツパリ興が醒めて了ふじやないか。エーン」

テーナ「それ聞いてチツミばかり安心を致しました。貴方に限つて、そんな事をなさる筈はありませんわな。初めて合ふた時、あんたは何と仰有いました。よもや忘れては居られますまい」

カールチン「こりやく、何を云ふか。そんな事を喋べるにユーフテスやマンモス、サモアが氣を揉んで嫉妬をやり居るから、昔のローマンスはここらで、うまく切りとしたら如何だ。エーン」

テーナ「若い時の蜜の様な戀を時々思ひ出すのもあんまり氣の悪いものじゃありませんぜ。人間の樂みは若い時のローマンスを時々思ひ出す位愉快な者はありません。それを忘れちや人生の趣味も何もあつたものじゃありませんわ」

ミテナ姫も酒に酔ひ潰れた勢で、四邊構はず昔の戀を喋り立てやうとする。

ユーフテス「何さまア、旦那様、奥様も面白い時があつたのですな。一遍聞かして下さ
いませな。私もセーリス姫と云ふ戀しい女が出来て居るのですから、研究のために聞かして貰へば大變都合が宜しいがな。あ、あ二夫婦に一人嫁か、セーリス姫も氣が利かないわい。ほんの一寸でい、から顔なつてつき出してくれるとユーフテスの肩身も廣くなるのだけれど、まだ公然の夫婦でないから仕方がない。先の樂みとしやうかな。エーン」

カールチン「こりやくユーフテス、エーンとは何じや。俺のお株を占領しやばつて誰に斷つて其エーンを盗んだか。エーン」

ユーフテス「別に盗んだのじゃありません。あんまり澤山に旦那様がエーンを落しなされるものですから一寸私が拾つたのでムりますよ。一時も早くセーリス姫とエーンを結び度うムりますわい。エーン」

テーナ「オホ、、、エーンくゝの掛合だなア。チツとはエーン慮したら如何だい。

エーンと月日は待つがよいと云ふじやありませんか。エーン」

ユーフテス「何と云つても戀の情火にこがされて胸に焰がエーンくゝと燃え立ちますわい。貴方等は、さうして夫婦仲よく笑つたり、意茶ついたりして居乍ら、まだ未婚者のユーフテスを氣の毒なとも、可愛相なとも思はず「お前のエーン談等は我不關

エーン』と云ふ様な態度であらつしやいますから、つい私もエーン世主義になりか
けは……しませんわい』

マンモス 『何は兎もあれ、こんな目出度い事はないじやありませんか。一日も早く成功
の日を見度いものでムリますなア』

ユーフテス 『成功の日は已に見えてゐるじやないか。現にセーラン王様が右守の神様に
位を譲つてやらうと仰有つたじやないか。王者の言葉に決して二言はあるまい。こ
れと云ふのもヤツバリ旦那様が器量の佳い賢明なお娘様をお持ちなされたからだ。

『あ、あ持つべきものは娘なりけりだ。ユーフテスも早くセーリス姫と結婚して美し
い傾國の娘を生み、老後を楽しみ度いものだ。アーン』

マンモス 『こりやくユーフテス、アーンなんて吐すにサツバリ貴様の縁談はアーンに

なつて了ふぞ。アーン』

ユーフテス 『こりや茶々を入れるのか、入れるなら入れて見い。俺にも量見があるぞ』

マンモス 『この國は茶々が名物だ。礪茶なつと煎茶なつと盛つてやらうか。チャ／＼ヤ

ーとこせ、ママチートコセ、セーリス姫さんに、うまくちよるまかされて、終ひの

果てには脇鐵砲、日頃の思ひも滅茶苦茶、蜴蛸の様な面をして、あんなシヤンに秋

波を送るなんて、チャンチャラおかしい。しまひの果てにやチャツチャ、ムチャに

此縁談は揉み潰されて了ふぞ。そんな事は此マンモスの天眼通でチャーンと分つて

居るのだ。エーン』

サモア 『オホ、、、今日はまだ、何とした面白い日でせう』

カールチン 『おい、貴様達、今日は右守の神の祝宴だから何なつと喋べつたが宜いが、

もう一二ヶ月するに俺は利帝利様だから、こんな氣樂な事は出来ないぞ。其位の事は貴様も辨へて居るだらうな。エーン」

ユーフテス 「そりや、辨へて居ますとも、貴方だつてあんまり良くない事を考へてゐなさるんだから、何れもちらへなりと埒が付きませうかい。アーン」

カールチン 「こりやく、善くない事とは何だ。チツと無禮ではないか。エーン」

ユーフテス 「貴方は寡慾恬淡なチツとも慾のないお方と云つたのですよ。凡て世の中は捉まへ様とすれば捉へられぬものです。旦那様は萬事にかけて抜け目なく、よくない方だから王様の方から昨日のやうにあんな結構な事を仰有るのでムリますわい。これを思へば時節は待たねばならぬものですな。都々逸 「時世時節の力と云へど、よくないお方が王となる」あゝ、ヨイトセ〜じや。おいマンモス、貴様も一つ前祝

に歌はんかい。大蛇の子の様にグイ〜飲んでばかり居やがつて何の態だ。チニコケコーでも唄つたら如何だい。アーン」

マンモス(鹿瓜らしく) 「飲む時には飲む、遊ぶ時には遊ぶ。然り而して聊か以て唄ふべき時には唄ふのだ。俺も若い時や、千軍萬馬の中を往來して來た英雄豪傑……ではない、その英雄豪傑の……傳記を読んで、チツとばかり威化力を養ふ……たに云ふチーチャーさんだからな。エーン、貴様の如き燕雀輩の敢て窺知する所に非ずだ、詩吟 「月は中空に皎々して輝き渡り、マンモスは悠々として酒杯に浸る、月影映す杯洗の中、絶世の美人我傍に在り」とは如何だ、うまいだらう。俺の詩歌は而も特別詠へだからな。エーン」

ユーフテス 「貴様の鹿はカイロー〜と紅葉林で四足の女房を呼ぶ先生の聲によく似て

居るわ。オット其カイローで思ひ出した俺も早くセーチャンと借老同穴の契を結び度いものだ。貴様のやうなシヤツチもない詩歌を呻ると気分が悪うなつて来るわいシカのシは死人の死だらうよ。もつと生命のある歌を歌つたら如何だい。アーン」

マンモス 「詩歌の詩の字は言扁に寺と云ふ字を書くじやないか。死人の納まる所は寺だよ」

ユーフテス 「ヘーン、うまい事言ふ寺あ、墓々死い」

かく管を巻く處へスタ〜とやつて来た一人の男、一通の手紙を差出し、

「旦那様、ハルナの都から急ぎの使が此手紙を持つて参りました」

と恭しく差出すを、カールチンは醉眼をカツと見開き、手紙を手早く受取り封を押切つて、文面に目をそ〜ぎ

カールチン 「エ、何、むづかしい文字が書いてあるぞ。何だかよく動く文面だなア。二筋にも三筋にも、素麵の行列のやうに文字が活躍してゐるわい。こりやヤツバリ大黒主様の御筆蹟と見わる、活神様のお筆は違つたものだ。よう〜益々活動し出したぞ」

と目をちらつかせ手を震はせ、讀まうとすれども如何しても讀む事が出来ない。

カールチン 「おい、テーナ姫、貴様一つ讀んで呉れないか。非常に墨痕淋漓として龍の走するが如き活きた文字だから何處かへ逃げさうだ。エーン」

テーナ 「ホ、、、これ妾が讀んで見ませう」

と手紙を受取り、

テーナ 「エ、……此度汝の願により騎馬の軍卒二千騎派遣致すべき所、隣國のセイナに

暴動起り、これを急々鎮定すべく、アルマンをして之を率ゐしめ征討に向はせられたば汝が請願に應じ難し。然し乍ら何時擾亂鎮定すとも圖り難ければ五百騎を急々汝が許に派遣すべければ、萬事萬端の用意あつて然るべし。右守の神カールチンへ、大黒主宣示……」

カールチン「よし、それで分つた。併し乍ら、隣國に騷動が起つて居るにも拘はらず、五百騎を派遣下さるはよくもよくも我々を信用して下さつたものだ。實に有難い、然し乍ら最早セーラン王の口から、あ、言つたのだから戦ひの必要もあるまい。然し何時悪智悪をかふ奴があつて變心されるかも知れない。其時の用意に五百騎の勇者があれば何事も都合よく行くに云ふもの、まア謹んでお受けをする事に致さうかなア。おい、ユーフテス、お前は大黒主様の使者に會つて宜しくお禮を申上

けて呉れ。俺が直接にお目にかゝるのが本意なれども、斯う氣樂相に酔ひ潰れた處を使者に見られたら大變だ。大黒主様の信用を落したらならないからな」

と稍酔ひも醒め、少しく眞面目になつて宣示した。

ユーフテス「委細承知致しました。使者に接見するのは此ユーフテスを置いて外に適當な人物は憚り乍らムいますまい。左様なれば特命全權公使として接見仕らう。いや我々一人では全權公使の貫目が足らぬ。マンモスお伴を致せ。アーン」

マンモス「エー、馬鹿にしやがるな。誰が貴様の下について行く奴があるかい。此マンモスはこれから出世をせんならん體だ。使者に顔を見られ……マンモスはユーフテスの下役じや……と思はれちや、將來のため大變な不利益だから、利害の打算上から見てまア止めにして置かうかい。エーン。あ、酔ふたく、こんなヨタンポで

如何して使者に接見が出来やうか。自在天大國彦命、守り給へ幸へ給へ。ゲ
ウツブー、ガラ／＼／＼。あんまり俄のお使で腹の虫奴が清潔法を初めやが
つて飲んだ酒までが逆流しだした。あ、苦しい事だ。苦しい中にも楽しみありだ。あ
、あ、ユーフテス、うまく使者に會ふたら内兜を見透かされぬ様にユーフテスや
るのだよ。エーン」

ユーフテス「旦那様、左様ならば今日は貴方の代理として使者に接見して参ります。宜
しうムりますかな」

カールチン「よし／＼、貴様に全權を委任するから、そこはうまくやつて来い」

ユーフテス「左様ならば、これより得意の外交的手腕を揮つて見せませう」

と云ひすて、バタ／＼と表へ駆け出した。ユーフテスは他の四人の様に酔ひ潰れては

居なかつた。セーリス姫の注意によつてカールチン夫婦の凡ての行動を視察するのが
第一の目的だつたからである。ユーフテスは表へ出で態にヒョロリ／＼と千鳥足に
なり乍ら、

ユーフテス(酔ひぎれ口調)「ハルナの國の大黒主の神様のお使はド、何處にケ、
、けつかるのだ。特命………全權公使の………俺はユーフテスさんだぞ。早く此處
へ………俺の前へ出て来んか。アーン」

門番のケールは此態を見て走り来り、

ケール「もし／＼、御家老様、ハルナの國のお使はあの手紙を渡したきり、これからカ
ルマタ國へお使に行くに云つて「一寸お待ち下され」に云ふのも聞かずに馬に鞭
ち一目散に歸つて了はれました。そんな足許で追掛ても駄目ですよ」

ユーフテス 「ナ、何だ、サツバリ後の祭で持も卸しも出来なくなつた。併し乍らこれれも何かの神様の御都合だらう」

と云ひ乍らヒヨロリくと足許危く奥を目がけて歸り行く。

(大正一一、一二、一三、舊九、二四、北村隆光録)

瑞 月

肉眼にしかと見ねぬ大空に

早彗星のさまよひ初めぬ

第二〇章 誘

惑 (二二四)

セーリス姫はイルナ城の我居間に一弦琴を弾じて居た。

「天と地とを造らし、

國治立 大神は

百の神達人々の

誠の親にましまして

仁慈無限の神徳を

遍く下し給ふなり

イルナの城は日に月に

入岐大蛇や醜狐

曲鬼共の蔓りて

首陀の姓より生れたる

右守の神のカールチン

鰻登りに登りつゝ

驕り高ぶり今ははや

セーラン王の御位を

誘 惑

三四九

狙ひ居るこそうたてけれ
 今燈火となりし時
 傾く城を立直し
 安く守らせたまひつゝ
 下させ給ふ時は來ぬ
 ヤスタラ姫の妹と
 イルナの城の太柱
 魔神に従ふユーフテス
 醜神共の企みをば
 神の御爲君の爲
 イルナの城は風前の
 救ひの神の現れまして
 セーラン王の身の上を
 魔神の頭上に鐵槌を
 あゝ面白し〜
 生れあひたる我こそは
 非道の事とは知り乍ら
 言葉の先に操りつ
 漏れなく落ちなく探らせつ
 世人のために村肝の

心痛むる苦しさを
 神は我等の眞心を
 必ず許したまふらん
 彼が心の憐れさを
 大事の前の一小事
 背かん由もないぢやくり
 操り來る苦しさを
 神が表に現はれて
 此世を造りし神直日
 唯何事も人の世は
 さはさりながら天地の
 清き御目に覺はし
 伴はられたるユーフテス
 妾は知らぬにあらねども
 セーラン王の勅
 涙を呑みて荒男
 あゝ惟神々々
 善神邪神を立て別ける
 心も廣き大直日
 直日に見直し聞き直し

身の過ちは宜り直す

尊き神の御教

セーリス姫の心根を

憐れみ給ひて逸早く

セーラン王の身の上を

守らせたまへ 惟神

此世を造りし大神の

御前に畏み願ぎまつる

御前に慎しみ願ぎまつる」

と歌を終り、合掌して聲も静に、「國治立尊守り給へ幸倍ひたまへ」と祈る折しも、足音を忍ばせながら入り来るはユーフテスであつた。セーリス姫はユーフテスの慌しく入り來りしを見て言葉急はしく、

セーリス 「ヤア其方はなつかしきユーフテス殿、何か變つた事がムいますかなア」

ユーフテス 「ハイ、俄に申上度き事があつて右守の神の前をつくろひ参りました。いよ

く大黒主の神が五百騎の軍隊を派遣し、右守の神と力を合せ、セーラン王様を退隠させんとの計略が調ひました。何にか用意を致さねばなりませんまい」

セーリス 「其軍隊は何時頃此處へ押し寄せて参りますか、分つて居りませうなア」

ユーフテス 「あんまり長くはありますまい。カルマタ國へ派遣された大足別の所へ参る使者が、往きがけに大黒主様の信書を携へ、右守の神の館へ放り込んで参りました。右守の神もや、安心して、もはや軍隊の必要がないから、お断り申さうかと迄云つて居りました處へ、五百騎の應援軍を送るとの書面を頂き、俄に鼻息が荒くなつて参りました。それ故取るものも取りあへず、貴方迄報告にやつて來ました」

セーリス 姫は平然として些も騒がず、微笑を浮かべながら、

セーリス 「それは段々と面白くなつて來ましたなア。さちらになつても、私と貴方の結

婚さへ都合よく出来れば好いちやありませんか。オホ、、、」

ユーフテス

「それやさうですが、矢張セーラン王様が押し込まれなかつては貴女だつて

あんまり都合はよくありませんまい。従つて私だつて羽振りが利きませんからなア」

セーリス

「兎も角黄金姫様の一つ申上げて來ますから、貴方此處に待つて居て下さい」

とツと立つて黄金姫の居間に進み入り、ユーフテスが報告の顛末を殘らず物語つた。

茲に黄金姫は清照姫、セーリス姫と三人鼎座してひそく對抗策を打ち合す事となつた。

黄金

「思ひの外大黒主の軍勢、早く押し寄せ來るさうだが、何とこれを阻止する考へ

はあるまいかなア。清照姫」

と云ひつゝ、清照姫の顔を覗いた。清照姫は微笑し乍ら

清照

「お母さん、それや何でも無い事ですわ。私が其五百騎を喰ひ止めて見ませうか」

黄金

「それは誠に結構だが、其方一人でさうして喰ひ止める考へですか」

清照

「兎も角右守の神を此處へ呼んで下さい。さうして私と右守の神と只二人一室に入

つて密談を遂げ、甘く右守の神より喰ひ止めさせて見ませう」

黄金姫は肯きながら、

黄金

「ホ、、、清さん、お前の美貌と辯舌を應用すれば何の事もありますまい。

さうぞ確りやつて下さいや」

清照

「三寸の舌鋒をもつて、五百の軍隊を一人も殘らず逐ひ散らすのも亦愉快でせう。

オホ、、、」

セーリス 「そんならこれからユーフテスに命じ、右守の神を當城へ呼び寄せませうか」

清照 「さうぞ早く、其手續きをして下さる」

黄金 「こんな時にはお轉婆娘も亦必要だ。清さんも随分こんな事には経験がつんで居るからなア。オホ、、、」

清照 「お母さん、冷かして下さいますな。何ほ秋だといつても餘りですわ」

黄金 「セーリス姫様、何卒早く頼みますよ」

セーリス姫はアイと答へて此場を下り、我居間に待たせて置いたユーフテスの耳に口を寄せ何事かを囁いた。ユーフテスは一切萬事呑み込み顔で、セーリス姫の居間を立ち出で、表に出で大地をぎん／＼威喝させ乍ら、木々の梢を渡る木枯の風遠慮會釋もなく笛を吹いて通る城の馬場を尻引からげ、矢を射る如く右守の神の館をさして京駈天走りに進み行く。

(大正一一、一一、一二、舊、九、二四、加藤明子録)

瑞 月

かんばしき肉の匂ひを虎猫が

かぎつけ窺ふ鶏の囀の邊

航行空中飛行船体が

時の氣流に遭ひて墜落

第二一章長

舌(一二二五)

右守の神のカルルチンは唯一人奥の間に端坐して、やがて一ヶ月の末には日頃の願望成就し、刹帝利の地位に進むだらう、さうすれば城内の大改革を施さねばなるまい先づ第一着手として何から始めやうかなと、猿猴が水の月を掴むやうな虫のよい考へに耽つて居た。其處へユーフテスは慌しく入り來り、

ユーフテス「モシ、旦那様、お喜びなされませ。イヒ、、、、。お目出度う御座います。貴方は本當に偉い方ですなア。偉大の人格者ですよ。ヤスダラ姫様が此間貴方のお顔を一寸拜み遊ばしてから、俄に病氣になられましたてブラ、として居られます。何卒一遍見舞に往つてあけて下さいませな。ドクトル、オブ、メヂチーネでもイ

ルナの湯でも、さうしてもかうしても治癒らないと云ふ御病氣になられました、朝から晩迄ウン、と唸り通し、それは、氣の毒で目を明けて見ても居られませんそこでセーリス姫様が「大變御心配遊ばして、其病源をお探り遊ばしたところ、ヤスダラ姫様は、エ、、、、と細い、柳の葉のやうな目をして「妾の病は氣の病だ、ウ、モ、リ、リ、」と云つて俯むいて後は何も仰有いません。そこで、呑み込みのよいセーリス姫様が「ハ、アこれは右守の神様にホの字とレの字だな。これは到底旦那様のお顔を見せねば本復は出來まい」とちやんと心の中で裁判してヤスダラ姫様に向ひ言葉淑やかに「モシ姉上様、何か心に秘密があるのでせう。妹の妾に云はれない事はありますまいから仰有つて下さいませ。こんな事でも姉さんの事なら御用を承はりませう」と鴛か鈴虫のやうな聲で尋ねられた處、ヤスダラ姫様

はやうく涙の顔を上げ「あ、妹、よう親切に尋ねて下さった。お前の心は嬉しいが、餘り吐かして口籠り何も云へませぬ。もう私は生て此世に望みのない身の上だから潔う死にます」と、とつけない事を仰有るので、セーリス姫様は益々御心配なされいろくご手を變へ、品を替へ、探つて見なされた處、姉計らんや妹計らんや、立派な奥様のある旦那様に戀慕してゐると云ふ事がハッキリ分りました。エへ、、、お目出度うございます。お浦山吹でございますわい」

カールチンは忽ち目を細うし、涎をくり乍ら、

カールチン「ウフン、そんな事があつたら、それこそ天地が引繰返るぢやないか。若い者なら、兎も角も、こんな年寄つた五十男にそんな事がありやうが無いぢやないか腹の悪い、そんなに人を煽てるものぢやないわ」

ユーフテス「イエく決して旦那様にそんな嘘を申上げて濟みますか。戀と云ふものは老若上下の區別はありません。又女と云ふものは虚榮心の強いもので、いいますから、旦那様がやがて刹帝利におなり遊ばすのを聞いて益々戀が募つたものと見えます。併し乍ら、貴方様には立派な奥様がお有りなさるんですから、そんな事を云ふては濟まない、セーリス姫様が懇々と説諭をなさつたさうですけれど、ヤスダラ姫様はさうしてもお聞き遊ばさず「此戀が叶はねば淵川に身を投げて死にから後の弔ひを頼むぞや」と、それはくエライ御決心、さうにも、かうにも手に合ひません。さうぞ一度姫様の館へ、助けると思ふて奥様へ内證で行つて上げて下さいませ。さうして貴方から篤くりと説諭して下さいましたら戀の夢も醒めるでせう」

カールチンは目を細くし乍ら、

カールチン 「何と困つた事が出来たものだなア。きれ／＼そんなら是からヤスダラ姫に會ひ、篤くり道理を説き聞かし思ひ切らしてやらう」

「いそ／＼として座を立つ。ユーフテスは後を向いて舌を出し、再び向き直つて顔を元の如くキチンと整理し、

ユーフテス 「色男様、オットドツコイ、大切な旦那様、左様ならばユーフテスがお伴致しませう。萬々一情約締契が調ふやうな事がふいましたら、貴方は私の相婿のお兄様なるべくお兄様と云はれるやうになつて貰ひ度いものですな。エへ、、、」

カールチン 「ユーフテス、矢張りいぞ、女房に悟られちや大變だからなア」

ユーフテス 「奥さんに氣兼ねさる處を見るに矢張りつゝは脈がありますなア。イヤお目出度う。お祝ひ申します」

カールチンは押へ切れぬやうな嬉しさうな顔を晒しつゝ、

カールチン 「オイ、ユーフテス、しようもない事を云ふものでないぞ。エへ、、、」
「思はず知らず笑をこぼし城内指して進み行く。ユーフテスも後に従ひ、舌を出し乍ら跟いて行く。カールチンはフト走り乍ら後を見ると、ユーフテスが長い舌を出して顔をシヤクつて走つて来るのが目についた。

カールチン 「こりや、ユーフテス、何だ長い舌を出して人を馬鹿にするない」

ユーフテス 「餘りお目出度いので、きつゝ結婚の時にはきつさり御馳走をして下さると思ひ、今から舌なめづりをしたのでういます。これは誠に失敬しました。エへ、、、」

カールチン 「こりや／＼ユーフテス、先へ往け、貴様が後から来るに何だか小忙しくつ

「仕方がないわい」

ユーフテスは、

ユーフテス 「そんなら旦那様、お先に御免蒙ります」

「云ふより早く先に立ち、もうかうなつちや後に目鼻はついて居ない、何程舌を出したつて見てもめらる、心配はないと、力一ばい長い舌を出し願をश्यकくり乍ら、とんくく」と驅け出す途端、高い石につまづいてバタリと倒れる機に舌を噛み、ウンと其場に血を吐いて打ち倒れた。カールチンはヤスタラ姫の事のみになつてユーフテスの舌を噛んで倒れて居るのに気がつかず、其躰に躓いて三間ばかり前の方にドスンと打ち倒れ「アイタ、、、」と膝頭を撫で乍らまだ気がつかず、

カールチン 「ユーフテスの奴何だ、俺が倒れて居るのも知らずに、主人を後にして雲を

霞と何處かへ行きやがった。何と脚の早い奴ぢやなア」

と吐きながら、とんくく」と道端のイト、やキリギリスを驚かせ乍ら城内指して一目散に走り行くのであつた。

(大正一一、一一、一二、舊九、二四、加藤明子録)

〓舍身活躍(辰の巻)終〓

瑞 月

地下深く潜みて彌勒の經綸を

爲せる真人の早く出よかし

騒がしきエトナの山の醜嵐

いよ／＼益々激しく成りぬ

舍身活躍辰の巻奥付

定價 金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地

編輯兼印刷者 櫻井重雄

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

發行兼印刷所 天聲社

【振替大阪二〇五三四】

大正十三年六月十日印刷
大正十三年六月廿五日發行

不許
複製

△ 豫

告 △

舍身活躍(巳の巻)

七月五日 護穴の豫定

目

次

序

文

.....

總

說

.....

第一篇 波瀾重疊

第一章

北光照暗

.....

第二章

馬上歌

.....

第三章	山	嵐
第四章	下り坂

第一篇 戀海慕湖

第五章	戀の畏
第六章	野人の夢
第七章	女武者
第八章	亂舌
第九章	狐狸窟

第三篇 意變心外

第一〇章	墓場の怪
第十一章	河底の怪

第十二章	心の色々
第十三章	擲掬
第十四章	吃驚

第四篇 怨月恨霜

第十五章	歸城
第十六章	失戀會議
第十七章	酒月
第十八章	酌苑
第十九章	野襲

第五篇 出風陣雅

第二〇章	入那立
------	-----	-------

舍身活躍(巳の巻)目次終

第二章	應酬歌
第二章	別離の歌
第三章	龍山別
第四章	出陣歌
第五章	借別歌
第六章	宣直歌

289
859

終

HM
73